

「幼子たちの命のために祈ろう」

新見キリスト教会 和気教会 土屋 信二



あなたの心を主の前に、水のように注ぎ出せ。あなたの幼子たちのいのちのために、主に向かって両手を上げよ。彼らは街頭のいたるところで、飢えのために衰えきっている。
哀歌2・19

今こそ祈りの手を上げて祈る時です。クリスチャンは金、名誉、学識、権力、等が無くても神に向かって祈ることが出来ます。イエス様も求めなさい「祈りなさい」と繰り返し弟子たちに教えています。

エレミヤの時代には、すでに北王国はアッシリア帝国によって滅び、南王国もバビロン帝国によって滅ぼされようとしていました。そのような中で、傷つき、飢え衰えている幼子のためにどうしたらよいのか、自分に何が出来るのかを考え、主の前に出ました。解決の道は全能の主を信じ祈ることでした。

現代の幼子の状態はどうでしょう。

①貧困の状態。朝食が食べられない子供たちが多くいる。②学校でのいじめ。家庭での暴力。③性的嫌がらせ。④自分を傷つける。劣等感で悩む。犯した罪で悩む。⑤死の恐怖。死んだらどうなるの。等々の複雑な問題が多くあります。

教会に来られる子供たちは少なくなっている現実の悲しさ。しかし、今こそ幼子への救霊は必要であります。主は目を覺まして祈りなさいと迫っています。

主はエレミヤを通して、幼子の命のために涙を流して祈っていますかと迫っています。

一、信仰を持って祈る。主の前に信じて祈る（マル

コ9・23）。

二、失望せずに祈る（ルカ18・1）。

三、幼子のように祈る（マタイ18・4）。

四、ご聖霊に満たされ、導かれて祈る（ローマ8・26）。サタンに勝利する。

滅びる者を救うために、イエス様はこの世に来て下さり、十字架にお架かりになられ、執り成しの祈りをして下さいました。私たちも必死になって幼子の命のために涙を流して祈ろうではありませんか。

牧羊者

目次

巻頭言	1
目次	2
カリキュラム	3
教師養成講座「旧約聖書丸ごと早わかり(1)」	4
キリストとの出会い	15
ヨシュア	45
クリスマス・年末	63
牧羊ひろば(服部喜望教会)	93
「牧羊者」のご購読・ご利用について	98
おわりに	98

〔凡例〕

1. 原語について…ギリシャ語は〔ギリ〕、ヘブル語は〔ヘ〕、アラム語は〔ア〕で表記しています。
2. 礼拝メッセージ例の最後の「さんび」の略記について
こ…「こどもさんびか」、こ改…「こどもさんびか改訂版」(以上、日本キリスト教
団出版局)、ホ…「教会学校・日曜学校 子どもさんびか」(日本ホーリネス教団出
版局)、イン…「教会学校さんびか」(インマヌエル教会学校部)、ふ…「ふくいん子
どもさんびか」、GS…「ふくいんこどもさんびか2 グローイング・ソング」(以
上、日本児童福音伝道協会)、PW…「プレイズワールド」(リビングブレイズ)

救い主と出会う

ルカ 19:1-10

●キリストとの出会い

行事	テーマ	聖書	暗唱聖句
10月3日	マルタとマリア	ルカ 10:38〜42	同42節
10日	盲人のいやし	ルカ 18:35〜43	同41節
17日	サマリアの女	ヨハネ 4:4〜26	同14節
24日	金持ちの青年の悲しみ	マタイ 19:16〜26	同26節
31日	ザアカイ	ルカ 19:1〜10	同10節

●ヨシユア

11月7日	ヨシユア① 雄々しくあれ	ヨシユア 1:1〜9	同6節
14日	ヨシユア② 約束の地	ヨシユア 3:1〜17	同17節
21日	ヨシユア③ 神に仕える決心	ヨシユア 24:14〜15	同15節

●クリスマス・年末

11月28日 アドベント・収穫感謝	マリアへの告知	ルカ 1:26〜38	同38節
12月5日	マリアの賛歌	ルカ 1:39〜56	同46、47節
12日	馬小屋で生まれたイエス	ルカ 2:1〜7	同7節
19日 クリスマス	救い主誕生の知らせ	ルカ 2:8〜20	同11節
26日 年末感謝	神の恵みを覚える	詩篇 103:1〜22	同2節

旧約聖書丸ごと早わかり(1)

藪野 潤一



はじめに

これから旧約聖書について学んでいきます。私が担当するのは創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記です。

まず、この五書について学ぶ前に、いくつかのことをお話しておきたいと思います。第一は聖書の中心的メッセージです。それは、神様の救いです。新約聖書において、それはイエス様によって成就しました。旧約聖書ではそのことを約束し、計画しています。

第二は、聖書の構造についてです。これは先の聖書の中心的メッセージと関連がありまして、新約も旧約も三つの区分に分けることができます。これは聖書を神様の救いの歴史として理解することによります。すなわち、旧約では、神様の

救いのご計画が過去・現在・未来にわたって記されています。第一区分が歴史で、創世記からエステル記までの17の書は過去の歴史に重点が置かれています。第二区分は現在で、ヨブ記から雅歌までの五書は個人の現在の経験に焦点を合わせています。第三区分は未来で、イザヤ書からマラキ書までの17の書は未来の預言に重きを置いています。

最後に、旧約39巻の名前と順番を覚える方法についてです。これには「ふくいん子どもさんびか」(日本児童福音伝道協会)19番の「せいしよめいもくずくし」を用いると便利です。メロディーは「鉄道唱歌」(ト汽笛一声新橋を)です。

創・出・レビ・民・申命記

ヨシヤ・士師・ルツ・サム・列王

歴代・エズ・ネヘ・エステル書

ヨブ・詩・箴言・伝道・雅歌

イザヤ・エレ・哀・エゼ・ダニル

ホセア・ヨエ・アモ・オバ・ヨナ・ミ

ナホム・ハバクク・ゼバ・ハガイ

ゼカリヤ・マラキ 三九

それではこれから「創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記」について学んでいきましょう。

I 創世記

創世記の著者はモーセです。創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記をモーセ五書といいます。創世記は歴史物語という形式の最古の歴史です。その目的は全人類にわたる歴史を示すことではなく、人類の救いに関することを示すことです。

創世記ははじめの書です。すなわち、世界のはじめ、人間のはじめ、罪のはじめ、そして神様の救いのご計画のはじめです。

(分解)

1 創造 (1・1～2・3)

神様は空と海と地を造られました。神様は植物や動物や魚や鳥を造られました。神様は人をご自分のかたちに造られました。私たちは時々、人から尊敬を払ってもらえないことがあります。しかし、私たちは神様のかたちに造られたのですから、威厳があり、価値があることをしっかりと心にとめましょう。

2 アダム (2・4～5・32)

① アダムとエバ

② カインとアベル

③ アダムの子孫

アダムとエバが神様に造られたとき、二人には罪がありませんでした。ところが、二人が神様に従わないで、木の実を食べたとき、罪を持つようになったのです。以来、人間は罪の下に置かれました。そして、罪の破壊的な力と苦い結果を体験しているのです。

人間はいつも選択に直面します。神様のご計画に従わない方を選ぶことが不従順です。人は悪を行うことを選びました。聖書の中の偉大な人物でさえ、神様の前に失敗し、神様

に従わなかった時があるのです。

神様に従わない時、罪は起ります。罪は人の命を損ないます。神様との関係の回復の道は神様に従うことです。神様の約束の恩恵にあずかる唯一の道は神様に従うことです。

3 ノア (6・1～11・32)

①洪水

②新世界の住民

③バベルの塔

ノアは神様に従って箱舟を造り、洪水によるさばきから免れることができました。神様がノアとその家族を守られたように、神様はご自分に信頼する者をお守りくださいます。

4 アブラハム (12・1～25・18)

①ひとつの国民とするとの約束

②アブラムとロト

③ひとり子を与えるとの約束

④ソドムとゴモラ

⑤イサクとリベカ

⑥アブラハムの死

アブラハムは父の家を離れるように命じられたとき、彼は神様に従い、カナンの地を行き巡りました。子どもが与えら

れるとの約束を長い間待ち、その長年待つて与えられた子どもを全焼のささげ物(燔祭)としてささげよと神様に命じられたときにも彼は従いました。これらの試みを通して、アブラハムは神様への信仰を持ちました。彼の生涯は信仰者の生涯とはどういうものかを示す手本です。

5 イサク (25・19～28・9)

①ヤコブとエサウ

②イサクとアビメレク

③イサクの祝福を奪うヤコブ

イサクは自己主張をしませんでした。彼は犠牲としてささげられそうになったときにも逆らわず、結婚する際にも選んでもらいました。イサクは自分の計画、自分の願いにまっさて、神様の御旨を優先したのです。

6 ヤコブ (28・10～36・43)

①ヤコブの家族

②ヤコブの帰郷

ヤコブはあっさりとききあきらめるような人物ではありませんでした。彼はおじのラバンに長年仕えました。彼は神様と格闘しました。たしかに、彼はたくさんの過ちを犯しました。しかし、その勤勉さを見るべきものがあり、これこそ主に対

する奉仕者の姿を示します。

7 ヨセフ (37・1～50・26)

① 売られて奴隷になったヨセフ

② ユダとタマル

③ 投獄されたヨセフ

④ エジプト王（ファラオ）の信頼を得たヨセフ

⑤ 兄弟との再会

⑥ ヤコブ一族のエジプト移住

⑦ ヤコブとヨセフの死

ヨセフは兄たちに売られてエジプトで奴隷になり、さらにはその主人により投獄されました。彼の生涯は苦難が続きましたが、それによって彼のうちに不屈の性格が形成されていきました。

II 出エジプト記

神様の選びの書が創世記なら、神様の救いの書が出エジプト記です。神様は選ばれた民イスラエルをエジプトの圧制から救出され、ご自分のために聖別されます。

本書の著者はモーセです。彼の一生は120年で、その生涯は

40年ずつ3つに分けることができます。第一はエジプトでの40年。モーセはエジプトでバロの娘の子として育てられ、当時の最高の教育を受けました。彼は自分がひとかどの人物であるかのように思っていました。

第二は荒野の40年。彼はエジプトから逃れてミディアンで荒野で家畜を飼いました。そこはまた神様の学校ともいうべきところで、自分が取るに足りない者であることを学んだのです。

第三は指導者としての40年。神様から使命が与えられて、イスラエルをエジプトから導き出して、約束の地へと導くという大事業に携わりました。彼は、神様が取るに足りない者を用いて、いかに大いなるみわざをなされるかを身をもって学びました。

(分解)

1 エジプトにおけるイスラエル (1・1～12・30)

① エジプトでの奴隷生活

② 神に選ばれたモーセ

③ ファラオのもとにつかわされたモーセ

④ エジプトに下されたさばき

⑤ 過越

イスラエルは400年間エジプトで奴隷の状態でした。残忍なエジプト王（ファラオ）はイスラエルを圧迫しました。彼らはエジプトの苦役から解放されることを切に祈りました。神様は彼らの叫びをお聞きになり、モーセを指導者としてお立てになりました。神様は力あるみわざによってイスラエルを救い出されました。確かに、神様はご自分の民の叫びをお聞きになります。神様はイスラエルをエジプトから解放なさったように、私たちを罪と死と悪から救い出してください。

2 荒野におけるイスラエル（12・31～18・27）

① 出エジプト

② 葦の海（紅海）を渡る

③ 荒野でのつばやき

神様はイスラエルをエジプトから導き出されました。神様は信頼できる導き手です。神様には奇跡をなさる力がありますが、通常は知恵ある指導者や集団の努力によって導いておられます。神様のことは知恵を与えてくれます。

しかし、葦の海（紅海）を渡った後、イスラエルに争いとおつばやきが起こりました。イスラエル同様、私たちもすぐに不平、不満をならべます。クリスチャンはこの世では闘いがあ

ります。しかし、困難でいやな状況にあっても、神様への信頼を失ってはなりません。

3 シナイにおけるイスラエル（19・1～40・38）

① 与えられたおきて

② 幕屋建設の指示

③ 破られたおきて

④ 幕屋の建設

神様はシナイにてイスラエルにおきてを与えられました。おきては三部で構成されています。第一部は十戒で、そこでは霊的、道徳的生活の絶対性が述べられています。第二部は市民生活に関するおきてで、日常生活を管理するための規則が掲げられています。第三部は儀式にかかわるおきてで、幕屋の建設や礼拝のささげ方などを示しています。

神様はイスラエルに選択と責任の重要性を教えられました。すなわち、おきてに従うならば、彼らは祝福を受けました。しかし、おきてを忘れたり、おきてに従わなかったりすると、罰や災いを受けたのです。現在、世界の多くの国々の法律は出エジプト記に記されている神様のおきてに基づいて制定されています。

神様は世界に対する真理と救いの源としてイスラエルを選

ばれました。エジプトを脱出したとき、彼らには軍隊も、学校も、知事も、市長も、警察もありませんでした。そのために神様は彼らにおきてを与え、日々の訓練を施されました。また、神様は記念日をどのように祝って、過ごしたらよいのかを教えられました。

おきてを通して、神様がどのようなお方で、イスラエルの行末をいかに期待しておられるかということを知ることができま。おきては今も私たちを教えます。なぜなら、おきては罪をあばき、神様が望んでおられる人生を示してくれるからです。

Ⅲ レビ記

レビ記という名称は、本書がレビ族に属する祭司とレビ人の奉仕や彼らによってささげる犠牲などに関する律法を記していることによります。

祭司やレビ人はイスラエルの人々を礼拝を通して指導しました。彼らはいわば当時の牧師だったのです。彼らは道徳生活や市民生活や犠牲に関するおきてが正しく行われているかどうかを見守り、人々に助言する神のしもべでした。

本書の中心思想は聖です。聖とは分離すること、神様のものとなることを意味します。あがない主が聖きよい方であられるので、あがなわれた者も聖でなければならぬことが強調されています（レビ11・45、19・2、20・7、21・8）。かつて神様はご自分の民をエジプトから分離されました。いまや神様はご自分の民からエジプトを分離されます。すなわち、エジプト流の生き方や考え方から神様が示される生き方や考え方に方向転換しようとされるのです。

罪深い人間が神様に近付き、神様と交わり、神様を礼拝するためには、犠牲の血が流されることを必要としました。「いのちとして宥めを行うのは血である」からです（レビ17・11）。

（分解）

1 聖い神への礼拝（1・1～17・16）

- ① ささげものに関するおきて
- ② 祭司に関するおきて
- ③ 人に関するおきて
- ④ 祭壇に関するおきて

犠牲には五種類ありましたが、その目的は二つです。一つは神様への賛美、感謝、献身をあらわすためです。もうひと

つはあがない、すなわち罪をおおい、罪を除くためです。動物の犠牲をささげることは、神様に自分の命をささげること示します。犠牲は礼拝と罪のゆるしのためです。犠牲をささげるにより、人は罪の代価ということを知ったのです。人は自分で自分の罪をゆるすことができないからです。命には命をもって。これが神様のご要求です。人は犠牲を通して、罪の深刻さと、罪のゆるしを願うために神様に近付くことの重要さを学んだのです。

旧約において動物の命は人の命を救うために犠牲となりました。しかし、これはイエス・キリストの死によって人間が完全にゆるされるまでの代替^{だいたい}でした。

神様は種々の礼拝についての詳しい指示を与えられました。これらの指示は神様のご性質を教え、礼拝に対する正しい姿勢を育むためです。

2 聖い生活 (18・1～27・34)

- ① 人が守るべき基本的なおきて
- ② 祭司の規定
- ③ 季節と祭り
- ④ 祝福を受けること

神様はイスラエルに聖い生活を送るための明確な基準とな

るべきおきてを与えられました。隣人愛について、性に關して、食物について、偶像礼拝について等等。それはイスラエルを周囲の偶像を拜む諸民族から分離し、区別するためでした。また、7つの祭日が宗教的、国民的祝日として設けられました。それらの日を通して、祝賀と献身の中に神様を礼拝することを身をもって学んだのです。

IV 民数記

本書はイスラエルの荒野での遍歴を記した書です。さまざまな出来事が記録されていますが、その中で「青銅のへび」(21・4～9)、「ヤコブの星」(24・17)といった救い主の模型や預言が示されています。創世記には、墮落した人間と、それにもかかわらず神様に選ばれた人間が、出エジプト記にはあがなわれた人間が、レビ記には礼拝する人間が、そして本書には奉仕する人間が描かれています。

本書にはイスラエルの数々の失敗が記されていますが、その原因は不信仰です。それは、

- ① 神様のことばに対する非難です。

神様が「そうだ」と言われたのに、イスラエルは「ちがう」

と言ひ、神様が「そうする」と言われたのに、イスラエルは「なごらない」と言つたのです。

② 神様の権能への非難です。

イスラエルはすでに神様の力あるみわざを見てきました。が、神様に信頼し、神様に期待することができませんでした。

③ 神様の善意に対する非難です。

神様はこれまでに限らない愛を注いでイスラエルを導かれました。ところが、カナンを目前にして彼らは神様の愛が尽き果てたかのように言つたのです。

(分解)

1 旅の準備 (1・1～10・10)

① 最初の人口調査

② レビ人の役割

③ 宿営の聖別

④ 旅の指図

モーセはイスラエルの人口調査を二度行いましたが、最初の調査により、イスラエルは防衛のために有効な部隊に編成されました。大きな働きが成功するためには、人は組織され、訓練されなければなりません。大事業を始める前にコストを

計算するのは賢明なことです。障害に気がつけば事前に回避することができるようです。

さて、旅の準備は神様がイスラエルに宿営の聖別に関する明確な指示をお与えになることから始まりました。神様はイスラエルが周辺の民族に同調することを望まれず、彼らの生き方、考え方が諸民族とは異なることを求められました。神様はイスラエルが聖なる民であることを望まれたのです。

2 約束の地への最初の働きかけ (10・11～14・45)

① 人々のつぶやき

② ミリアムとアロン、モーセを非難する

③ カナンを偵察した者が反抗を煽る

カデシにて十二人がカナンの地に送られ、彼らはかの地を偵察しました。彼らが帰ってきたとき、そのうちの十人はカナン進入をあきらめて、エジプトにもどるべきだと報告しました。その結果、イスラエルは約束の地、カナンに入ること拒みました。問題に直面して彼らは神様にそむいたのです。反逆は暴動によって始まりませんでした。それはモーセと神様への不平、不満、つぶやきとなつてあらわれたのです。神様への反逆は深刻な事態です。それは軽く受けとめるべきではありません。罪に対する神様の罰は非常に厳しいもので

あることを覚えるべきです。反逆は全面的な戦争でもって始まるとはかぎりません。むしろ、巧妙なやり方で、たとえば不平、不満を言ったり、相手を非難したりすることで始まるのです。

イスラエルは不信仰のために約束の地に入ることを妨げられました。歴史を通して神の民は不信仰と戦い続けてきました。不信仰が日常生活に足場を築くことがないように、それを防がなければなりません。不信仰によって、神様が約束された祝福を享受できなくなるからです。

3 荒野をさまよう (15・1～21・35)

①追加された規則

②指導者たちがモーセに反抗する

③祭司とレビ人の義務

④新しい世代

イスラエルが神様に対して不満をもらし、モーセを非難したとき、彼らはきびしい罰を受けました。1万4千人以上の人がモーセに反抗したために死んだのです。コラの反逆の結果、コラとダタン、アビラム、そして彼らの家族は、コラに加担した250人の祭司と共に死んだのです。もし不平や不満を胸のうちにとどめておくなら、容易に破滅への道が開かれます。指

導者に不平を言い、非難することは慎まなければなりません。反逆のゆえに、イスラエルは40年間荒野をさまようことになります。このことは、いかに神様が罪をきびしく罰せられるかを示すものです。40年はエジプトの習慣や価値観が染み込んでいる人々が死に絶えるのに十分な時間でした。そして、40年はまた新しい世代を神様の道に歩むように訓練するために要した時間でもありました。

4 約束の地への二度目の働きかけ (22・1～36・13)

①バラム

②二回目の人口調査

③ささげものに関する指示

④ミディアン人への復讐ふくしゅう

⑤ヨルダンの東にとどまった部族

⑥モアブの平野にて

モアブ人とミディアン人はバラムを用いてイスラエルを呪って陥れようとしたが、できませんでした。しかし、どうしたらイスラエルを偶像礼拝に引き込むことができるかという手がかりを得ました。バラムは何が正義であるかを知っていました。しかし、彼は物質的な報酬の誘惑に負けて、罪を犯しました。正しいことを知っていることは、それだけ

では決して十分ではありません。正しいことを行わなければならないのです。

カナンは約束の地です。そこは神様がアブラハム、イサク、ヤコブに約束された契約の地です。カナンは神の民がまことの礼拝のために分かれて住むべき地です。神様の罪に対する罰はきびしいものですが、神様は回復と希望を備えていてくださいます。神様の愛は本当に驚くべきものです。イスラエルを約束の地に導いたのは神様の愛でした。

V 申命記

本書は服従の書で、中心思想は従順です。本書の元来の意味は「第二の律法」です。それはまったく新しい律法ではなく、39年前にシナイにおいて与えられた律法が回顧され、説明されているのです。エジプトを出てきたふるい世代の人々は、カレブとヨシユア以外はみな荒野で死んでしまいました。そのため、新しい世代の人々に律法を示す必要があったのです。本書の著者はモーセで、彼の死を記した最後の記事は後継者ヨシユアによると言われています。本書はモーセ五書の最後の書です。創世記は人の創造と墮落、出エジプト記は血

によるあがない、レビ記はきよめと礼拝、民数記は歩みと失敗、申命記は福音的約束を教えています。

(分解)

1 神がなされたこと—モーセの最初の説教

(1・1～4・43)

モーセは、イスラエルをエジプトの奴隷状態から解放してくださった神様の力あるみわざを回顧しました。彼は、いかに神様がイスラエルをお助けになったか、またいかにイスラエルが神様に従わなかったかということを数え上げました。神様の約束と力あるみわざを回想することにより、神様のご性質を知ることができます。神様がこれまでなさったことを理解できれば、神様をもっと深く知ることができるようになります。また、イスラエルが犯した失敗を学ぶことにより、人生で過ちを犯すことから守られます。

2 聖い生活の原則—モーセの第二の説教

(4・44～28・68)

- ① 十戒
- ② あなたの神、主を愛すること
- ③ まことの礼拝についてのおきて

④民を治めることについてのおきて

⑤人間関係についてのおしえ

⑥従順と不従順の結果

神様とイスラエルの間の契約は、約束の地に入ろうとしている新しい世代の人々によって更新される必要があります。神様への信仰は自動的に、機械的に引き継がれるものではありません。それは新しい世代、またその世代の各人が自らの体験を通して、自覚して継承されるものなのです。

神様のおきてに従うことでイスラエルは祝福を受けましたが、従わないときは祝福を受けることができませんでした。神様への従順あるいは不従順は、必ず今の生活と後の生活に影響を与えます。

3 使命遂行の召し—モーセの第三の説教

(29・1～30・20)

モーセはイスラエルが使命を遂行するように呼びかけました。神様は心を尽くし、いのちを尽くし、力を尽くして、ご自身を愛するようにと呼びかけておられます。

神様の真実で忍耐深い愛は、神様のさばきよりもはるかに頻繁(ひびん)に聖書に描かれています。神様はイスラエルに対して、彼らへの約束に対して真実であられることにより、愛をお示

しになりました。神様は、イスラエルが形式的におきてを守るといような愛ではなく、心の底からご自身を愛する愛を求めておられるのです。

神様は、契約を批准(ひじゅん)するためには、服従の道を選ばなければならぬことをイスラエルに念を押されました。神様に従うことを決断すれば、人生に祝福がもたらされます。しかし、神様にそむくならば、きびしい災いがもたらされます。選択如何で人生は変わるのです。神様に従うことを選ぶなら祝福を受け、人間関係も祝福されます。しかし、神の道を放棄することを選ぶなら、自分も他人も傷つける結果をもたらしします。

4 指導者の交替—モーセの最期(31・1～34・12)

神様はイスラエルの子どもたちに神の道を教えるように命じられました。確実に神様と神様の教えを理解できるように教育が施されました。神様の真理を次の世代に伝えることは重要です。

モーセはいくつかの重大な誤りを犯しましたが、彼は高潔な生涯を送り、使命を果たしました。

(※「牧羊者・二〇〇六年度Ⅰ巻」に掲載されたものを、一部再編集して掲載しました。)

聖書

ルカ10・38〜42

タイトル

マルタとマリヤ

暗唱聖句

しかし、必要なことは一つだけです。マリヤはその良いほうを選びました。

ルカ10・42

目標

み言葉を聞くことこそ、なくてはならないことであると知る。

マルタとマリヤ

(櫻井めぐみ)

この二人はとってもおもしろい姉妹で、性格が正反対なのです。こういう兄弟姉妹はよくいると思います。みんなはどうでしょうか。

マリヤってどんな人

妹のマリヤは、私たちの模範にしたい人です。なぜなら彼女が取った行動は、人からは批判されるようなものであっても、イエス様はそれを褒めたからです。それは今日のお話の中では、他のどんなことよりもイエス様のことを聞くのを優先させたことです。でも他にもありました。イエス様からは褒められたけれど、他の人からは文句を言われたことが。それは、ヨハネの福音書12章

に出てきますが、マリヤはイエス様の足に、ものすごく高いアロマオイルを塗ったんです。それを見ていた周りの人たちはマリヤを非難しました。「どうして、この香油を高いお金で売って、貧しい人にあげなかったのか。なんでもつたないことをするんだよ」というわけです。でもイエス様はマリヤのその行動を喜ばれました。マリヤは「もつたない」とは思いませんでした。イエス様を愛していたからです。私たちもそうです。自分が心から愛している人のためには、お金も時間も「もつたない」とは思わないんです。そして本当に愛している人ならば、その人の言葉をずっと聞いていたいと思うものなのです。

マルタってどんな人

それでは今度は、お姉さんのマルタを見てみましょう。マルタはイエス様をもてなすために、ごちそうの支度をはたかばかしてはいたんですが、そのために彼女の心は落ち着きませんでした。イライラしていたのです。しかし妹のマリヤの方は、手伝いもせずに座って、イエス様のことをじっと聞いています。それでマルタは文句を言ってしまう。「主よ。私の姉妹が私だけに」

しをさせているのを、何ともお思いにならないのですか。だからマルタは、一生懸命がんばる人なんだけれど、せっかちでイライラしがちな人でした。

なくてはならないこと

そんなマルタにイエス様は言われました。「マルタ、マルタ、あなたはいろいろなことを思い煩って、心を乱しています。しかし、必要なことは一つだけです。マリヤはその良いほうを選びました。」マルタだって、イエス様を愛していたからこそ、おもてなしの準備をがんばっていたはずですよ。でもそれは、マルタにとって一番必要なことではない、と主は言われました。彼女が思い煩って心を乱していることが何よりの証拠です。私たちにあって、たった一つの必要なことは、愛するイエス様のことばを聞くことです。マリヤはそれを選びました。でも、この時イエス様はマルタを叱ったというよりはむしろ、微笑んでおられたのではないかと思います。マルタ、マルタ、ちょっと落ち着きなさいよ。イエス様はマリヤの方を褒めながらも、マルタのことだって愛しておられたのです。みんなは、マルタとマリヤどちらのタイプに近いでしょうか。マルタタイプの人が多いかもしれ

れませんね。もちろん、マルタみたいな人のこともイエス様はとっても愛しておられます。でも、みんなにとって必要なことは何であるかを今日、みことばから知りましたから、みんなはそれを心がけてほしいのです。神様の教えの中で一番重要なものは、「心を尽くし、いのちを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」です。イエス様もそうおっしゃっています。マリヤはイエス様を愛していました。だからイエス様が家に来られた時は、少しでも長くイエス様のそばで過ごしたいと思いました。イエス様の語ることを聞くことがマリヤにとって一番必要なことだったので。それが、絶対になくってはならないことであり、同時に、彼女のいちばんの喜びでした。みんなもそうです。私たちには聖書があります。みんなは神様のみことばを聖書から聞くことができます。聖書からみことばを聞くこと。そしてお祈りの中で神様とお話すること。それがなくてはならないことです。それはマリヤにとってそうだったように、みんなにとって、どんなことにも勝る大きな喜びとなるでしょう。

♪ガリラヤの風かおる丘で♪（新聖歌40）

聖書 ルカ10・38〜42 テーマ マルタとマリヤ

序論

(福井文彦)

イエスの一行がエルサレムに向かわれる途中、ベタニアの村に住むマルタとマリヤの二人の姉妹の家をお訪ねになったことなのです。二人は主に対して対照的な行動をとりました。そのとき、忙しさに気をいらだて、腹を立てた姉のマルタに対して、静かにイエスは、しかし、必要なことは一つだけです」と言われました。

一、マルタとマリヤ

イエスが村へ入られると、マルタは主の一行を家に迎え入れました。しかし、この訪問は突然のことではなく、予定されていたことだと思われまゝです。そこで今までイエスのために接待の準備をしていたマルタは、再び準備を始めたのです。

ところが、マルタはいろいろなもてなしのために心が落ち着かず」とありますから、姉のマルタだけが、料理などの準備をしていたように見えます。ところが、文

語訳聖書には「主よ、わが姉妹われを一人のこして働かするを、何とも思ひ給はぬか」とあります。ここに、「われを一人のこして」とありますから、イエスをお迎えするまで二人一緒に接待の準備をしていたのです。

しかし、イエスをお迎えしてマルタは台所に行き、再びイエスの接待の準備を始めたのです。一方のマリヤはイエスのお話を聴くことを選取り、そのまま「主の足もとに座って、主のことばに聞き入って」いました。ところが、マルタは忙しくて、接待の準備が思うようにはかどらないために気をいらだてて、マリヤとイエスの両方に腹を立てたのです。

二、無くてならぬもの

マルタは「みもとに来て」、主よ。私の姉妹が私だけにもてなしをさせているのを、何ともお思にならないのですか」と、イエスとマリヤの二人を非難しました。自分だけ働かせて、一人イエスの足元にすわっているマリヤもマリヤだが、それを許しておられるイエスもあんまりだ、と非難しました。さらに「私の手伝いをするように、おっしゃってください」と、イエスに対して命令

したのです。本当は彼女が命じられるべき存在であるにもかかわらずです。

そのときイエスはおっしゃいました。〈マルタ、マルタ、あなたはいろいろなことを思い煩って、心を乱しています。しかし、必要なことは一つだけです。マリアはその良いほうを選びました。それが彼女から取り上げられることはありません〉。

マルタはいろいろなこともてなしのために気が落ち着かずいました。そこでイエスは本当に必要な食事は一つだけです。それはみ言葉を食べることに、すなわち、み言葉に聴くことであると言われたのです。

三、み言葉に聴く幸い

それではみ言葉に聴く幸いとはどのようなものでしょうか。

①み言葉はいのちを与えます。イエスは「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばで生きる」(マタイ4・4)と言われました。人は神のことばによって養われ、支えられ、初めて真のいのちに生きることができます。

②み言葉によって成長します。「生まれたばかりの乳飲み子のように、純粹な、霊の乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです」(1ペテロ2・2)。み言葉によってクリスチャンは成長するのです。

③み言葉に聴従するとき勝利、祝福があります。み言葉に聴従するとは、み言葉を心に貯えて、私たちの人生が心の中にあるみ言葉によって律せられて行くことです。そのとき、勝利、祝福、繁栄があります(ヨシユア1・7～8)。

④み言葉によってみこころを知ることです。マリアは、「純粹で非常に高価なナルドの香油を一リトラ取って、イエスの足に塗り、自分の髪でその足をぬぐった」(ヨハネ12・3)のです。マリアはみ言葉を聴いて、みこころを知り奉仕したのです。

結論

クリスチャンにとって最も大切なことはみ言葉に聴くことです。そのため、聖霊によって生活を律し、デボーションのときを確保することです。

研究資料

(宮澤清志)

本日の目標が「みことばを聞くことこそ、なくてはならないことであると知る」とある。担当者は、まず、この目標を頭に置きつつみ言葉に聞きたいものである。CS教師にとって、「み言葉を聞く」ことが、他の何にもまさって大切だと考えるのである。

同時に、週題「マルタとマリア」にあるように、この個所の主人公である「マルタとマリア」の人物像にも目を留めたい。マルタとマリアの信仰の相違、またその信仰が表出した行動の相違にも、私たちは注意深く目を留めたいと思う。

また、担当者は、今回の聖書個所の他にヨハネ11・1～54と12・1～11にも同時に目を通して頂きたい。すると、マルタは「イエスが来られたと聞いて、出迎えに行った」が、マリアは「家で座っていた」(11・20)。またマルタは「給仕し」(12・2)ていたとある。見事に今回の個所と一致する。更にマリアは「純粹で非常に高価なナルドの香油を一リトラ取って、イエスの足に塗り、自分の髪でその足をぬぐった」(12・3)ともある。主の足

もとに座ってみ言葉に聞き入るにせよ、ナルドの壺を一撃のうちに割るにせよ、それらはマリアにとっては主に對する愛の表れであったことに注目したい。と同時に、その行為は周囲の人々の憤激を買う非常識な行為と思われたことも付記しておきたい(ルカ10・40、ヨハネ12・5)。

テキスト

38 ある村 「ベタニア」のこと。マルタとマリアの家は、このベタニアにあった(ヨハネ11・1、18)。

39 主の足もとに座って、主のことばに聞き入っていた
マリアのこの行為は、弟子としての行為である(申命記33・3、使徒22・3「ガマリエル足もとで」が直訳)。「足もと」とは、弟子の位置であり、当時、ユダヤ教の教師(ラビ)たちは、女性が「ひざまずく」こと、つまり弟子になることを許しはしなかったのである。このことから、マリアは自ら男性と同様に振る舞っていたのである。このことがマルタの怒りを増幅させたとも考えられる。マルタはこの当時の常識的な考えにとらわれていたのである。ちなみに「足」とは神による勝利者をあらわ

す言葉であり、ひれ伏すべき「足」であり、また教えを請うべき「足」という意味も持つている。

40 もてなし (ギ)ディアコニア 文字通りには「奉仕」であり、「接待」(口語訳)、「手厚き奉事」(新契約聖書)等と訳されている。ルカはこの言葉に心が落ち着かず (ギ)ペリスパオー) を入れることによって、否定的に捉えている。またこの語は、「まわりへと引かれる」という意味を持つ言葉でもあり、マルタは多くの奉仕へと引かれていたのである。

41 思い煩って (ギ)メリムナオー) その人の実存に関わる重要な事柄が心を取りこにする、というような意味を持つ。心の分割、分散をも意味する言葉である。心を乱しています (ギ)ソリュバゾー) 混乱させる、という意味。外側の動揺をあらわす言葉である。受動文であり、多くのことによって心乱されていることを、「思い煩う」と重ねることによって更に強調した文章である。

42 多くの翻訳のある言葉である。ほう (ギ)メリス) 分け前、(食事の)分量、という意味の言葉。マルタは自らの義務を果たそうとするあまり、イエスの教えを傾聴することを拒んだ。イエスを囲む「持ち分」のために、

せつせと立ち働いていたのである。他方マリアは「良いほう」を選択したのである。マルタはイエスに、彼の取るべき行動を指図しようとする。他方マリアはイエスに、彼女が何をすべきかを語ってもらおうとしたのである。この差は大きい。私たちも、しばしばマルタのように、主に指図をするという大胆にも大きな罪を犯してしまうことがある。しかし、私たちがすべき事は、他のすべてを脇に置いて、イエスの教えに聞き入ることである。これがすなわち『あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい』、また『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい』(27) という新約の律法を成就すること。そして、このことは「取り去ってはならないもの」(42、口語訳)なのである。

参考図書 A・M・ハンター「イエスの譬えの意味」(新教出版社)。A. T. Robertson, Word Pictures in the New Testament Volume II. The Gospel According to Luke (Broadman) 他

聖書

ルカ18・35〜43

タイトル

盲人のいやし

暗唱聖句

わたしに何をしてほしいのですか。

ルカ18・41

目標

願いを明確にして祈る者となる。

見えなかった人

(櫻井めぐみ)

「アメイジング・グレイス」(驚くばかりの恵み)という有名な賛美歌があります。日本語の訳では「驚くばかりの恵みなりき この身の汚れを知れるわれに」という歌詞で歌われています。もとは英語の曲ですが、詳しく訳すという意味になります。

「神の恵みとはなんとすばらしいものでしょう
さまよっていた私を神は見つけ出し

こんな惨めな者をも救ってくださいました
かつて私は何も見えない者だったけれど

今は見えるのです」

それまでずっと神様が分からずに歩んでいたのに、自分
が救われて神様がわかるようになったのは、神様の恵
みのおかげなんだということですよ。

イエス様がエリコという町に近づいたとき、一人の目の見えない人に出会いました。この人は本当に目が見えなかったのです。見る事ができない人の一番の願いは何でしょう。それはもちろん見えるようになることです。彼はイエス様が来られたことを聞くと、「ダビデの子のイエス様、私をあわれんでください」と大声で叫びました。「ダビデの子」とは、救い主を意味します。この人はイエス様が自分を救ってくださる救い主だと信じていたのです。ところが、ここで邪魔が入りました。まわりにいた人たちが、彼を黙らせようとしたのです。「うるさい!」と、怒られてしまいました。もしみんながこの見えない人だったらどうしますか? ①「わかりました」と言って、叫ぶのをやめる ②叫ぶのをやめない。どちらを選ぶでしょう。

わたしに何をしてほしいのですか

目の見えない彼は、②の方でした。彼はみんなに黙れと言われても、叫ぶのをやめませんでした。それどころか、ますます激しく、イエス様に向かって叫び続けたのです。邪魔されてもあきらめようとはしませんでした。もう自分がみんなにどう思われるかなんて考えてる場合

じゃないのです。みんなが嫌がるからやめよう、とは思いませんでした。だって、どうしてもイエス様に自分の願いを聞いていただかなくてはならないからです。彼はしつこく叫び続けました。ふつうは「しつこい」って、あまり良い意味ではないと考えがちです。でも聖書は、神様にしつこく祈ることがどんなに重要かを教えています。イエス様は、彼に対してうるさいからやめなさいとは言われませんでした。かえってその叫びのゆえに立ち止まって彼を連れて来させ、その願いを聞かれたのです。「わたしに何をしてほしいのですか。」と。

見えるようになれ

盲人だった彼は、単純に目が見えるようにしてほしいということを願いました。イエス様はそれに対して「見えるようになれ」と言われたのですが、イエス様のことばには二つの意味が含まれています。一つは、彼が肉眼で見えるようになること。もう一つは、「信仰」によって神を見ることです。そもそも、神様は目には見えないお方です。神様の声をもっとはつきり聞こえたり、神様の姿が私たちによく分かるように現れてくれれば信じられるのと思うのですが、それは逆なのです。私たちが神

を見る——つまり神を知るためのたった一つの方法——それは信じることなのです。

あなたの信仰があなたを救った

イエス様は「あなたの信仰があなたを救いました。」とおっしゃいました。盲人の彼には、間違いなく信仰がありました。彼はイエス様こそ自分を救う方だと信じて、はつきりと自分の願いを申し上げました。そして彼は救われ、「見えるようになる」という求めに応えていただいたのです。彼に信仰がなければそれは不可能なことでした。でも、私たちが信仰を持つことも、願いを聞いていただくことも、本当は全部、神様の恵みによることなのです。

イエス様は、みんなにも「わたしに何をしてほしいのですか」と問われています。「もしあなたがわたしを信じるなら、あなたはわたしを知ってください。そしてわたしの力のすばらしさを、その恵みの豊かさを知ることになるでしょう。」

イエス様を信じて、まっすぐに祈り求めましょう。

♪驚くばかりの♪（新聖歌233）

聖書 ルカ18・35〜43 テーマ 盲人のいやし

序論

(小泉 創)

イエスを救い主として信じていることは、当たり前前のことではありません。イエスを受け入れることを妨げるものはさまざまあることがこの章の中でも告げられています。自分はあの人よりも正しくて神に受け入れられていると他人を見下げることであったり、偶像のようになって手放せなくなっている富であったり。今日のこの箇所では目の見えない人がイエスと出会う中に、神の恵みがあらわれています。

一、あわれんでください

目が見えず、いつも道端であわれみを乞うていたこの人が、いつもと違った人々のざわめきを聞いて、「何が起きているのですか」と尋ねると、「ナザレ人イエスがお通りになるのだ」という答えが返ってきました。この人もイエスが目の不自由な人たちを癒しておられたことを聞いて知っていたのかもしれませんが(7・21)。イエス様を

求める思いがあふれ、大声で叫びました。

「ダビデの子のイエス様、私をあわれんでください!」

この人はイエスがダビデの子、救い主であることを信じていたのです。それなのに人々は彼を黙らせようとしていました。人々はどこにでもいる一人の物乞いによってイエスをわずらわせたくなかったのでしょうし、自分たちはよいが、この人のための順番はまだ来いていないと言いたかったのかもしれませんが。イエスは、罪深い者、神の前に顔もあげられないような人こそ、神に顧みられると教えられておられるのですが(14)。しかしこの人はとどめられてもあきらめるところか、ますます激しく叫びました。「私をあわれんでください」。

条件を満たすために差し出せるものは何もありません。神のあわれみによって、一方的に与えられる恵みが必要なのです。

二、願ひ

イエスは、この人の声を聞いて立ち止まりました。そして目の見えないこの人を、自分の所に連れてこさせて、お尋ねになりました。

「わたしに何をしてほしいのですか」。

この人が求めたことは何だったでしょうか。

「主よ、目が見えるようにしてください」。

この人は今までどれだけ困難な人生を歩いて来たでしょうか。他の人々のように、それはあなたの罪、先祖の罪のせいだと言われたこともあったことでしょう（ヨハネ9・2）。ダビデの子として来られる救い主だけが、自分の人生を造り変えてくださると信じていたのでしょうか。

イエスは、「見えるようになれ。あなたの信仰があなたを救いました」とおっしゃり、彼の目を開いてくださいました。人にはどうすることもできないことの中に、神の力があらわされました。

三、イエスに従っていく

この人の、開かれた目が見たものは何だったでしょうか。さっきまで自分をたしなめていた人々が口をあけて彼を見つめる姿でしょうか。これから踏み出さなければならぬ現実の光景でしょうか。

この人が見たのは、目の前におられ、自分を見つめて

おられるイエスでした。この方が、神様の素晴らしさを文字通り見せて下さったのです。開かれた目でイエスを見上げて神をあがめ、イエスについていく人生を始めました。見えない神の栄光を見せていただける人生が続くのです。

私たちのまわりにも課題は山積しています。これからの時代を担っていく子どもたちの未来を手放しに喜びづらいです。しかしイエスを見つめて従っていくならば、主と共に歩んでくださるならば、どのようなときにも素晴らしい人生を歩むことができます。

結論

私たちも、子どもたちも目が開かれて、ずっとイエスを見つめ続けられるように、そして生涯イエスに従い続けていけるように祈りましょう。

研究資料

(中島啓二)

この盲人の癒やしの記事は、その前後の記事とも深いつながりを持っている。イエスに癒やしを求めて叫びつづけたこの盲人は、不正な裁判官の譬え(1-8)で裁判を求め続けたやもめに似ているし、この盲人を黙らせようとした人たちの動機は、幼子を退けようとした弟子たち(15-17)のそれと似通っている。またこの盲人は、永遠のいのちを求めてイエスのもとを訪れた金持ちの指導者(18-23)と非常に対照的に描かれている。自分が霊的に盲目であることに気づいていなかったあの指導者は、この世の富への執着から、永遠のいのちに対する思いを引つ込めてしまった。それに対してこの盲人は、見えるようになりたいという自分の切なる願いを、自分を癒やす力があると信じるイエスに対して切実に訴え、周囲の妨害にも屈することなく、叫び続けたのである。この盲人の粘り強い叫びの中に信仰を見出されたイエスは、彼をお癒やしになった。そしてその足でエリコの町に入り、ザアカイとお会いになるのである。この盲人は社会的弱者であり、ザアカイは社会からの疎外者であっ

た。イエスはそんな彼らにも目をとめ、その声に耳を傾け、信仰を引き出し、弟子としてくださるのである。

テキスト

35 エリコに近づいたとき エリコはエルサレムから約27キロ東に位置する。並行記事では「エリコを出て行かれると」(マルコ10・46)とある。この違いを、エリコには当時の市街とは別に古い市街があったと説明する注解者もいる。一人の目の見えない人 マルコは彼の名をバルティマイと記している。エリコの門の前はエルサレムへの巡礼者の通り道であったので、物ごとに適した場所であった(貧者への施しは宗教的な善行であった)。

37 ナザレ人イエスがお通りになるのだ ルカ福音書では盲人の癒やしの記事はここだけである。ただし7・21に「(イエスは)目の見えない多くの人たちを見えるようにしておられた」とあり、彼は盲人を癒やすイエスの力を人から聞いて知っていたのだろう。

38 ダビデの子 これは王として来られるメシア(救い主)を意味する称号である。マリアへの受胎告知には「神である主は、彼にその父ダビデの王位をお与えになります」(1・32)とある。盲人によるこの呼びかけはイエス

を救い主と認識する一種の信仰告白と言える。**私をあわれんでください** この叫びはこの盲人がイエスには自分を助ける力があることを信じていたことを示している。

39 黙らせようとしてたしなめた 弟子たちが幼子退けたときのように(15)、人々はこの社会的弱者の叫びを、イエスの重要な使命の前に取るに足りないものとみなしたのであろう。また民族主義的な匂いにおのする「ダビデの子」という叫びがローマ当局を刺激することへの恐れも、盲人を黙らせようとした一つの理由かもしれない。**その人はますます激しく叫んだ** しかしこの盲人はそのような圧力にも屈しなかった。それどころか、その声はますます大きくなっていった。目が見えない中、自分の持つ唯一の手段である声を用いて、自分を癒やす力を持つと信じるイエスとのつながりを、彼は求めつづけた。その粘り強さを、イエスは彼の信仰と呼ばれた。

41 わたしに何をしてほしいのですか この盲人が何を望んでいるかなど聞くまでもないことであった。しかしここでイエスは、彼のうちから信仰を引き出すために、あえてこう尋ねられたのである。

42 見えるようになれ 直訳は「見上げよ」。イエスが

ただ一言こうお命じになったとき、その言葉の権威と力がただちにあらわれたのである。**あなたの信仰があなたを救いました** 香油を塗った女(7・50)、長血の女(8・48)、癒やされた十人の中の一人(17・19)にも同じ言葉が告げられた。人の側の信仰に応答して、神の力による癒やしが実現されたのである。ここで言う信仰とは、「ダビデの子」という信仰告白よりもむしろ、群衆の圧力に屈しなかった彼の根気強さを直接的に指すと見る点で、多くの注解者は一致している。

43 ただちに 癒やしの実現の即時性を強調する表現である。**神をあがめながらイエスについて行った** 彼は神を賛美し、弟子となってイエスに従った。「わたしに従って来なさい」(22)と招かれながら、悲しげにイエスの前から去ったあの金持ちの指導者とは、ここでも対照的である。**民はみな神を賛美した** 癒やされた本人だけでなく、そこにいるすべての人が、この癒やしが神から出たものであることを認めるに至ったのである。

参考図書 注解書 Ellis (NCB), Marshall (NIGTC), Nolland (Word), 榊原康夫 (新聖書注解 新約1)。その他 The IVP Bible Background Commentary: NT

聖書

ヨハネ4・4〜26

タイトル

喜びいつぱいの心

暗唱聖句

わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいのちへの水が湧き出ます。

ヨハネ4・14

目標

罪を悔い改め、キリストを信じて、喜びに満ちた生涯を送る。

導入

(飯田勝彦)

皆さんは、どんな時でも喜んでいたいと思うでしょう。どうしたら、嫌なことや悲しいことがあっても喜んでいられることができるんだろう。その秘訣を知りたいよね。

心が渴いていたサマリアの女

ユダヤの北に、サマリアという地域がありました。ある時、イエス様がそこに来られ目の前にあった井戸の側に座って休まりました。それは、ちょうど昼の十二時ごろでした。するとそこに一人の女性が井戸の水を汲みに来ました。普通、水汲みは女性が朝にする仕事でした。朝になると井戸は、多くの人で賑わい、いろいろな話をして楽しんでいました。でも、イエス様の前に現れた女

性は違いました。彼女は人が集まらない時間をねらって水を汲みに来ていたのです。皆さんは「今日は、誰にも会いたくないし、話もしたくない」と思ったことがある？ この女性は、そうでした。それは、彼女が大変不幸な結婚生活を繰り返していたからでした。それで彼女は、人の目を避けて生きていたのです。彼女はどんな気持ちで過ごしていたでしょうか。彼女の心は渴いており、井戸の水では心まで潤すことは出来ません。彼女の心には喜びがありませんでした。皆さんの心は今、どのような状態ですか。この女性のように渴いていませんか？

「いのちへの水」を与えるイエス様

イエス様は、この女性に「水を飲ませて下さい」と話しかけられました。当時、ユダヤ人とサマリア人は付き合いをしていませんでした。でも、イエス様はそのようなことは構いなしに、女性に近づいて行かれたのです。

皆さんはクラスの中で、嫌がられている友だちに話しかけていますか？ 「あいつと話す自分も仲間はずれにされる」と、みんなと一緒に無視してない？

イエス様はどのような人であつても親しく声をかけてくださるお方です。

イエス様は、この女性と会った時、彼女に何が必要なのか分かりました。それは「いのちへの水」でした。イエス様は、「わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいのちへの水が湧き出ます。」と言われました。イエス様が与えてくださる「いのちへの水」とは、イエス様にある真の喜びです。そしてこの喜びは、決してなくなりません。イエス様は、私たちに失われない真の喜びを与えてくださいます。

「いのちへの水」を求めるサマリアの女

この女性はイエス様に自分の夫のことを聞かれたことで、自分が罪深い者であることを自覚しました。そして、自分のありのままの状態をイエス様に告白しました。罪は、イエス様からの喜びを妨げます。その罪を悔い改めるとき、イエス様は私たちに素晴らしい恵みを与えてくださいます。

女性は、いのちへの水の話聞いて終わりませんでした。「主よ。私が渴くことのないように、ここに汲みに来なくてもよいように、その水を私に下さい。」とその水

をイエス様に求めたのです。

たとえば、皆さんがマクドナルドに行つたとしても、メニューには美味しそうな物がたくさんありますね。でも、店に行つただけではハンバーガーを食べることは出来ません。「ビック・マック・セットをください」と自分の欲しい物を、注文しないと食べることは出来ません。皆さんもサマリアの女性のように自分の罪を素直に悔い改めて、いのちへの水を大胆に求めてください。

イエス様は皆さんの心に、失われない喜び、あふれ出る喜びを与えてくださいます。そして、その喜びは変わることがないのです！

まとめ

イエス様がくださる喜びの水が心に満ちるなら、皆さんの顔は輝きます。そして、それが家族や友だちにあふれ流れて、周りの人々を幸せに行きます。

ぜひ、イエス様を信じて、喜びにあふれさせて頂きましょう。

♪歌いつづけよう主のあいを♪ (ホ77)

聖書 ヨハネ4・4〜26 テーマ サマリアの女

序論

(小泉 創)

イエスの方が、バプテスマのヨハネの方より、弟子の人数もバプテスマを授けることも上回っていることがパリサイ人たちに伝わりました。イエスはそのことを知って、エルサレムからガリラヤへと向かわれました。その途中であえて立ち寄られたサマリアで主のみわざがあらわされました。

一、生ける水

旅の疲れを覚えられたイエスは、サマリアのスカルという町で、弟子たちが食物を調達してくれるのを待っておられました。ヤコブの井戸の傍らに座っておられたのは、正午ごろ（第六の時）でした。そのような日差しが強いときに水を汲みに出てくる人はいませんから、ここに現れたサマリアの女は、人目を避けていたのです。

女はイエスから水を飲ませてほしいと話しかけられて驚きました。ユダヤ人は宗教的にきよくないサマリア人

と付き合ってこなかったからです。その隔てを乗り越えて、イエスはこの女と向き合われました。

女はヤコブの井戸から水を汲めることを誇りに思っていたことでしょう。しかし目の前の人物は、あなたが知って求めるなら、それに勝る生ける水を与えと言うのです。飲めば決して渴くことがなく、内で泉となつて永遠のいのちへの水が湧き出る。そのような水があるならばいただきたいという思いがこの女の内に与えられました。

二、渴いた心に

誰もが願いを満たすために、さまざまなことを求めます。この女にも渴きがありました。この女が五人の夫と別れ、今は別の男と暮らしている事をイエスはご存じでした。女は驚きつつ、イエスを預言者と認めると、信仰的な話題について語りはじめました。サマリア人の先祖はゲリジム山で礼拝をしたが、ユダヤ人は礼拝すべき場所をエルサレムにあると言っている、という言葉は、何を告げているのでしょうか。サマリア人である私と、ユダヤ人の預言者であるあなたとの間には、乗り越えられ

ない隔ての中垣がある、ということだったでしょうか。

イエスはユダヤ人の礼拝の正しさを認めつつ、新しい道を示されました。御霊と真理によつて父を礼拝する時が今来ている、そのように礼拝する人たちを父は求めておられると告げられました。神は、ユダヤ人、サマリヤ人、さらには異邦人、すべての違い、隔てを取り除いてくださる方です。神はすべての人の渇きを癒し、新たに、形式ではなく、御霊と真理によつていのちにあふれた、まことの礼拝をささげる者にして下さるのです。

三、永遠のいのちへの水が湧き出る

サマリヤの女は、キリストと呼ばれるメシアによつて、一切のことが知らされることを待っていました。すると目の前のイエスが「あなたと話しているこのわたしがそれです」と答えられたのです。これまでのやり取りを通して、目の前におられるイエスのその言葉を女は信じ、そして変えられました。

女はせっかく持ってきた水がめのことも、水汲みのことも忘れ、町の人々にイエスのことを伝えて回りました。来て、見てください、この方がキリストなのでしょう。

と。それは、この女が今まで乗り越えられなかった隔てが取り払われている光景です。私たちもイエスを救い主として信じる中に、自分の力では離れることのできなかったことから、そしてからみつく罪からも自由にされる道がひらかれます。

人々は今までと違った喜びにあふれた女の姿を見、その言葉によつてイエスのもとにきました。そして二日の間に多くのサマリヤ人がイエスを世の救い主として信じ、サマリヤの地が福音の喜びで満たされていったのです。

イエスが差し出された生ける水はひとりの女の内であり、その渇きを癒したばかりか、周囲の人々をも生かす永遠のいのちへの水が湧き上がり流れ出したのです。

結論

私たちの罪深さもすべてご存じで、一切の渇きを癒すことができるのは救い主イエス・キリストだけです。生ける水をいただき、永遠のいのちへの水が多くの人をも潤してください。恵みを見せていただきましょう。

研究資料

(宮澤清志)

テキスト

4 しかし、サマリアを通じて行かなければならなかった この言葉はヨハネにおいては神により与えられた道を言い表している。神の必然ともいべき言葉。

5 スカル ヤコブの井戸の北東約一キロメートルのところにありといわれている。

6 旅の疲れから 主は私たちと同じ肉の体をもち、罪以外は人間としての状態をこごとくとっておられた(ピリピ2・6～11)。時はおよそ第六の時であった欄外注には「正午ごろ」とあり、また従来の公用聖書である口語訳は、ユダヤ的な時刻の呼び方(夕方の六時から朝の六時、朝の六時から夕方の六時)に従って、「第六時」を「昼の十二時」と訳している。

9 ユダヤ人はサマリア人と付き合いをしなかったのである サマリアがアッシリアに滅ぼされ、サマリア以外の地域からサマリアに移住させた外国人と結婚(雑婚)し、ユダヤ人としての純粋性を失ったことから、両者の反目が起こった。

10 神の賜物 文脈から考えると、その次に登場する「永遠のいのちへの水」(14)を指すところもできる。生ける水 永遠の命に至る水をさす。また神に対する人間の霊的な渇きを根源的にいやす「いのちの水」のことでもある。

11 前節の主の言葉に対して、この女性は「生ける水」のことを「わき出る水」としか理解していなかった。

13 この水を飲む人はみな、また渇きません 主は、彼女の心を、自らが与えようとする「永遠のいのちへの水」へと導こうとされる。その手始めとして、ヤコブの井戸からの水は、たとえ喉を潤したとしても、また喉が渇くものであることを指摘される。

14 わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいのちへの水が湧き出ます。 主が与える水は ①内面的なものであり、②その人のうちで源泉となるものであり、③永遠のいのちに至らせる水である。このことは、イエスの使命について、またイエスが何者であるかについて、明確に宣言している個所である。

16～18 この個所から新しい展開にはいる。イエスは自らの真相を明らかにするが、女はまだイエスが与えよう

とする水の真の意味はわからずにいる。しかし、この水を真に与えられたいと願うならば、自らの真相を知ることと罪の悔い改めは、避けて通ることができない。

19 主よ。あなたは預言者だとお見受けします 「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか」(マタイ16・15)とあるように、まずイエスの本性をわからせることが重要である。

20 この山 ゲリジム山といわれている。サマリヤ人はアブラハムにならない、ゲリジム山に神殿を築いて礼拝をささげていた(創世記12・6・7、申命記11・29等)。一方ユダヤ人はシオンの山の上に立てられたエルサレム神殿で礼拝をささげ、そこに神がおられると信じていた。

21 この山でもなく、エルサレムでもないところで、あなたがたが父を礼拝する時が来ます 主イエスは、福音のもとではもはやエルサレムかゲリジムかといった場所とは問題ではなく、どこにおいても父なる神に出会う道を見いだすようになるというのである。

23 イエスはここで、来るべき新約の時代における真の礼拝のあり方を示される。それは、エルサレムかゲリジムかといった場所を越え、あるいはユダヤ人かサマリヤ

人かといった人種を越えて、あらゆる場所において、あらゆる人種によってささげられる礼拝である。それは、霊とまことによる礼拝である。**御霊** 様々な解釈が見られるが、神の霊、聖霊を指すという解釈が一般的である。

真理(**ギリ**アレーセイア) ヨハネにおいては、アレーセイア(真理)はキリストにおいて表されている。キリストこそ真理そのもののお方である(ヨハネ14・6)。**今がその時です** 福音の時代が到来し、すでに始まったことをイエス自ら宣言している(マルコ1・15)。

24 神は霊ですから 神の中心的な属性(ご性質)のひとつ。神が霊であるから、私たちはどこにおいても神を礼拝することができるのである。

25 前節のイエスの言葉にもかかわらず、彼女はまだメシヤ到来を将来的な事柄として捉えている。

26 わたしがそれです(**ギリ**エゴ・エイミ) 神がモーセにご自身を顕された言葉(出エジプト3・14)と同じ言葉を用いて、イエスご自身を語られる。このイエスとの出会いによって、彼女の行動は一変する。

参考図書 ビ・エフ・バックストン『ヨハネ傳講義』(バックストン記念霊交会) 他

聖書

マタイ19・16〜26

タイトル

金持ちの青年の悲しみ

暗唱聖句

それは人にはできないことですが、神にはどんなことでもできます。

マタイ19・26

目標

砕かれた心でキリストを信じ、救いを受け取る。

導入

(土屋開夫)

電車やバスには「優先席」というのがありますよね。高齢の方や体の不自由な方、またお腹に赤ちゃんがいる方などのための座席です。以前は、この優先席のことを「シルバースhirt」と言っていました。シルバーは何色の事かわかりますか？ そう、銀色です。皆さんは電車やバスで席をゆずってさしあげた事がありますか？

ところで私たちの心にも「ゴールド（金色）shirt」としても言うべき大切な優先席があります。この席は自分にとって一番大切な方に座ってもらうための席です。

富める青年

ある時、一人の青年がイエス様のところにやって来ました。とてもお金持ちだったそうですから、きつととても高そうな良い服を着て、金や宝石の飾りもつけて、いかにも立派そうな外見だったことでしょう。

そして、お金持ちというだけでなく、「十戒」を始めとする聖書の教えをよく守って、真面目に生きてきたようです。この青年は「お金」も、また「自信」もたっぷり持っていたのです。

みんなの中にもそんな子がいますか。「ボクは、パパやママや学校の先生からも、『良い子だね』って、よくほめられるんだ。学級委員もしてるし、テストもいつも90点以上とってるし、バイオリンも習ってる。そしてボクのパパは会社の社長なんだ。大きな犬だって飼ってるんだ…」。

どんなよいことをしたら…

この青年はイエス様に質問しました、「先生。永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをすればよいのでしょうか」(16)。永遠のいのちが欲しい、天国に入れる約束が欲しい…、そういう願いがあったのでしょうか。

そして、もしかしたら、既に90点ぐらいは取れている自信があったのかも知れません。

でもイエス様はこう言われました、「良い方はおひとりです」(17)。本当に良い方、完全に正しい方は、本当の神様だけです。人間はどんなに良いことをしたとしても、永遠のいのちを得られるほど、また天国に入れるほど良いものになることは決して出来ません。心に自分ではどうすることもできない「罪」があるからです。

イエス様はその事に気づかせるために、こう言われました、「完全になりたいのなら、帰って、あなたの財産を売り払って貧しい人たちに与えなさい」(21)。この言葉聞いて、青年は悲しみながら立ち去りました。この青年の心の「ゴールドシート」には、お金や財産が座っていたのです。この青年にとって、心の中で一番大事だったのは、そして頼りにしていたのは、お金や財産だったのです。それを手放すことは、彼にはまだ出来ませんでした。永遠のいのちよりも、イエス様よりも、財産の方が大事だったのです。

どうすれば永遠のいのちを得られるか

どうすれば永遠のいのちを得られるのでしょうか？ ど

うすれば天国に入れるのでしょうか？ それは心の「ゴールドシート」にイエス様をお迎えすることです！ その席は、王様であるイエス様だけが座るべき、イエス様の「優先席」なのです。

今、キミの「ゴールドシート」には、何が座っていますか？ 自分ですか？ それとも大切な宝物？ もしかして、スマホ？ ゲーム？

まとめ

イエス様は言われました、「金持ちが天の御国に入るのは難しいことです」(23)。心の中に宝物をいっぱい持つてる人は、イエス様に「ゴールドシート」をゆずるのが難しいでしょう。でもイエス様は「難しい」とは言われませんが、「不可能」とは言われませんでした。その証拠に聖書では、東の博士やザアカイさん等、お金持ちの人もイエス様を受入れ、宝物をささげています。「それは人にはできないことですが、神にはどんなことでもできます」(26)。

♪もうふりむかない♪ (PW18、イン86)

聖書 マタイ19・16〜26 テーマ 金持ちの青年の悲しみ

序論

(石田高保)

人間は自分の存在している意味をさまざまな方法で確かめたいと願うものではないでしょうか。

一、こころ満たされない生活

ここにひとり、心の満たされない青年がいました。彼の家は裕福であり、高い教育を受け、真面目であり、健康でもあり、何一つ不自由なことはないように見られていました。当時、お金持ちであることは神の特別な祝福を受けていると考えられていました。けれども彼の心は満たされず、それがなぜなのかはわからなかったのです。悩んだすえ有名なイエスに解決を求めてやって来ました。(先生。永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをすればよいのでしょうか)、実に真面目な質問です。彼はもつと財産が欲しいとか、贅沢がしたいとか言ったわけではありません。永遠の生命という人間にとって最も大切なものを真剣に求めているところは見事です。

それに対してイエス様は答えました。(いのちに入りた

いと思うなら戒めを守りなさい)。〈殺してはならない。姦淫かんいんしてはならない。盗んではならない。偽りの証言をしてはならない。父と母とを敬え。あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい〉。これに対して青年は、(私はそれらすべてを守ってきました)。彼は自分の真面目な生き方を誇りとし、生きる拠より所としています。自分が正しい生き方をすれば、それに対して神がいのちを与えてくれるものと考えているのです。裏返せば真面目に生きなければ神はいのちを与えてくださらないと考えています。つまり自分の人生は行いにかかっているものであり、正しく生きるかどうかで自分を評価しようとしているわけです。しかしそれでは心が満たされませんでした。

するとイエスは(完全になりたいのなら、帰って、あなたの財産を売り払って貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を持つことになります)。イエスは誰たれに対しても全財産を投げ出さなければ、永遠のいのちを得られれないと言っているわけではありません。この青年のように財産を心の拠り所よりどころにしている人に対してチャレンジしているのです。いや、財産だけでなく自分の誇りとするものを拠り所よりどころとしている人に対してチャ

レンジしています。仕事、地位、健康、趣味、スタイル、容貌、自分の正しさ、何でも心の拠り所となり得ます。しかしそれらは良いものであっても、人を心から満足させることのできない偽りの拠り所であって、いつか必ずはしごを外されます。〈青年はこのことを聞くと、悲しみながら立ち去った。多くの財産を持っていたからである〉。王より飛車を可愛がりと言われますが、自分の財産と永遠のいのちを天秤にかけたとき、財産のほうを選んでしまったわけです。さてあなたはイエス様以外に拠り所としているものがあるでしょうか。

二、こころ満たされる生活

大半の日本人が宗教に対して距離を置くようになった理由の一つは、豊か過ぎることにあると言われます。それはみんながお金持ちになったという意味ではなく、神が必要に感じられないほど豊かになってしまったということです。たいていのことがお金さえ出せば解決する社会になっています。わざわざ神頼みする必要を感じないのです。主は「貧しい人たちは幸いです」と言われます（ルカ6・20）。実際、貧しい人は自分の持ち物に頼れず、神にだけ頼ろうとするので、神に立ち返りやすいもので

です。いつばう豊かな人は、神に頼らなくても自分で解決しようとするし、たいていのことはできてしまい、意識しないで神から自分を遠ざけるので、ますます神がわからなくなります。ですから主は〈金持ちが天の御国に入るのは難しいことです〉と言われました。

では文字どおり貧しくなければ救われないのかというとそうではありません。「心の貧しい者は幸いです」（マタイ5・3）、多くの日本人のように豊かであっても、自分は頼りにならない、神に頼りたいという、神に対してオープンな人は救われやすいのではないのでしょうか。〈あなたの財産を売り払って貧しい人たちに与えなさい〉。文字どおりの意味ではなくても、身近な人への親切でも、ボランティアでも、誰かに自分を与えるとき、心は満たされます。だから「受けるよりも与えるほうが幸い」なのです（使徒20・35）。さて、あなたが人に自分を与えることで心満たされた体験はどんなことでしょうか。

結論

主はできないことをしろと命じられているのではなく、自分の持っている何かを人のために与えるようにチャレンジしておられます。

研究資料

(辻林和己)

この個所だけでなく他の福音書の並行記事（マルコ 10・17～27、ルカ 18・18～30）にも目を通し、共観福音書（マタイ、マルコ、ルカ）による相違点にも目を向けたい。この個所の前に、主イエスが子どもたちを招かれた記事（19・13～15）があることに留意したい。

テキスト

16 一人の人 マタイによればこの人は「青年」である（19・22）。マルコによれば資産家（10・22）、ルカによれば「ある指導者」である（18・18）。どういう指導者かはつきりしないが、新共同訳では「議員」と訳されている。ユダヤ教の指導者で高い地位にあったのであろう。永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをすればよいのでしょうか。当時の多くのユダヤ人は、律法を行うことによつて救われると考えていた（ローマ 9・32）。この青年は永遠のいのちを得ることができると確信を持てず、主のもとに来て尋ね求めた。なにか「良いこと」を「する」ことによつてそれを得られると考えている。しかし、

絶対的な意味で「良い」と形容できるのは神だけである。
17 良い方はおひとりです 主イエスは、この青年の視点を神ご自身に向けようとしておられる。

18～19 戒め 出エジプト 20・12～17、申命記 5・16～21に記されている「十戒」の第五戒以下の対人関係についての律法。隣人を自分自身のように愛しなさい レビ 19・18の引用。主イエスは彼に隣人との関わりを問われた。

20 私はそれらすべてを守ってきました この人には、律法をずっと守ってきたという自負があった。しかし、それら（律法）は、主が山上の説教で語られたように（マタイ 5・21～48）、人の内面にまで深く関わるものであった。彼の律法に対する認識はあまりにも皮相的なものであったのである。彼とは対照的にパウロは、律法とは何かを神と自分に深く問うた（ローマ 3・20～24等）。

21 マルコでは、主は「彼を見つめ、いつくしんで言われた」（10・21）とある。愛のまなざしで、永遠のいのちへ招こうとされた。青年は十戒を守っていると思っていたが永遠のいのちを得ている確信はなかった。何が足りないのかを問う青年に対し、主は完全になりたいのなら

ば持ち物を売り、貧しい者にほどこし、ご自分に従うことを求められた。主は「自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい」(マルコ8・34)と言われたが、求めておられるのは自我の要求を否定し、神の御旨に生きることであつて、ここで主は救いの条件が善行にはないことを明らかにしておられる。

22 神と富に兼ね仕えていた彼には主の言葉に従うことはできなかった(6・24)。多くの財産や物質的なものは神との関係の妨げとなりやすいのである。悲しみながら立ち去った このとき、彼が主イエスのもとから立ち去らず主から命じられたことを実行できない自分の弱さや罪を認め、さらに主に救いを求めていけば、主にさらに取り扱われたであろう。「ある議員」と「取税人」の違いはあるが、金持ちだったザアカイは悔い改めて救われている(ルカ19・1～10)。(この青年の悔い改めの可能性については、P・ウイルクス著『救霊の動力』113頁を参照のこと。)

23 天の御国 直前の子どもたちの記事にもあるように、自分の無力さを認め、主にすがり、主の救いを信じる者のみが入ることができる。何も持たない子どもと地

位も財産も名誉もある青年との対比がなされている。

24 らくだが針の穴を通る らくだは当時、ユダヤ地方で最大の動物と思われていた。これは不可能であることを表す一種の誇張的表現。しかし、金持ちが神の国に入るよりは、易しいのです との主の言葉に弟子たちは困惑した。

25 ユダヤでは財産を豊かに持つ者は神から祝福された者であると考えられていた。そのような者が神の国に入ることが難しいということであれば、誰が救われることができるかと弟子たちは考えたのである。

26 それは人にはできないことですが、神にはどんなことでもできます 救いは人の力によつては獲得することはできない。ただ、父、御子、御霊なる三位一体の神のみがなされるみわざである。主イエスの十字架と復活による救いは神からの賜物であつて、人はそれを信じて受け取るだけである。

参考図書 内田和彦「マタイの福音書」『新実用聖書注解』、増田誉雄「マタイの福音書」『新聖書注解 新約1』(以上のちのことば社)、他

聖書

ルカ19・1〜10

タイトル

新しくされる出会い

暗唱聖句

人の子は、失われた者を捜して救うために来たのです。

ルカ19・10

目標

救い主キリストと出会い、心に迎え入れる。

導入

(飯田勝彦)

今、皆さんの一番の仲よしの友だちのことを心に思ってみてください。楽しくありませんか？これから皆さんには、皆さんの出会いがあるでしょう。その中でもどうしても出会って欲しい人がいます。イエス様です！皆さんは、イエス様にもう出会っていますか？

あなたを知っておられるイエス様

エリコの町にザアカイという人がいました。彼の仕事は「取税人」と言って税金を取る仕事でした。皆さんが百貨で物を買うとレジで100円払います。その10円が税金です。これはきちんと決められています。でも、当時の取税人たちは、自分が得をするように、決まっているよりも多くの税金を、人々から取りたてていました。また、

仕事の都合でユダヤ人に嫌われていた異邦人とも関わりがありました。ですから、取税人はユダヤ人から罪人と思われ、嫌われていたのです。ですからザアカイも、町で嫌われ者でした。

ある時、町にイエス様が来られました。町中の人イエス様を一目見ようと集まっていました。ザアカイもイエス様を見ようとしました。でも、彼は背が低く、しかもたくさんの人に遮られて見るできませんでした。でも、彼はあきらめず、木に登ってイエス様を見たのです。するとイエス様がザアカイを見上げて「ザアカイ、急いで降りて来なさい。わたしは今日、あなたの家に泊まることにしているから」と言われました。ザアカイにとつて、イエス様とは初めての出会いでした。それなのに、イエス様はザアカイのことを知っておられたのです。不思議ですね。

イエス様は今日、あなたの名前を呼ばれます。イエス様はあなたの名前だけではなく、あなたのことをすべて知っておられるのです。

あなたの友となられるイエス様

イエス様は、みんなから嫌われているザアカイの家に

入られました。当時、ユダヤ人たちは罪人と言われるような人と付き合つてはいけませんでした。周りの人はイエス様に「あの人は罪人のところに行つて客となつた」と非難したのです。でも、イエス様は、ザアカイの家に入り、彼の友だちになつてくださったのです。その時、ザアカイの気持ちはどうだったでしょう。みんなから嫌われ、ずっと寂しかったザアカイは、すごく嬉しかったに違いありません。

今日、イエス様は「あなたの友だちになりたい」と言われます。

あなたを救ってくださるキリスト

ザアカイにとって、家にお客さんが来るなんて久しぶりだったかも知れません。彼は、できる限りのもてなしをしたでしょう。そして、イエス様と色々な話をすることができたでしょう。すると突然、ザアカイは立ち上がりました。そしてイエス様を「主よ」と呼びました。これは彼がイエス様を救い主として心に迎えた瞬間でした。ザアカイは、イエス様こそ自分の罪を赦し、寂しさを慰めてくださるお方だと信じたのです。

その時からザアカイは変えられました。イエス様に

「主よ、ご覧ください。私は財産の半分を貧しい人たちに施します。だれから脅し取った物があれば、四倍にして返します」と言い出したのです。

ザアカイはイエス様と出会うまでは、自分に得になることばかりを考えていました。でも彼はイエス様に出会つて、人から奪う者から人に与える者に変えられました。また、自分の罪を悔い改めました。ザアカイは、以前とは違う新しい人にされたのです。

まとめ

ザアカイを新しく変えられたイエス様は、あなたの心も新しくしたいと願っておられます。そのために、「わたしをあなたの心に迎えてくれないか」と今日、言われます。あなたはどうしますか？ イエス様を心に迎えてこそ「イエス様に出会った」ことになるのです。

あなたはイエス様と出会い、心新しくされたいですか？

♪すくいの主イエスに♪ (ホ95)

聖書 ルカ19・1～10 テーマ ザアカイ

序論

(石田高保)

イエス様と出会った一人の人物が、生まれ変わった出来事を通して教えられることは何でしょうか。

一、人は神を求めている

取税人のかしらザアカイは「イエスがどんな方かを見ようとした」、これは彼自身の体験談です。ザアカイはイエス様について強い関心を持っていました。彼の行動を見ると単なる好奇心だけではないようです。背が低い、ため群衆にさえぎられて見えなかった、(先の方に走って行き、イエスを見ようとして、いちじく桑の木に登った)、普通の人はここまで突飛な行動はとりません。「いい大人が子供じみたことを」と人々は思ったことでしょう。ここにはイエス様を見たい、知りたい、お話を聴きたい、できれば自分の気持ちを聞いてもらいたいという切実な願いがあったのではないのでしょうか。彼は「取税人のかしら」ですから地位があり才能があり財産がありました。しかし人望はないどころか毛嫌いされ、

手下の取税人たちだけが仲間でした。お金はあってもそれは彼自身が言っているように「脅し取った物」で築いた財産でしたから、良心に痛みを覚え、本当の満足はなかったでしょう。「富む者は満腹しても、安眠を妨げられる」(伝道5・12)。何不自由のない生活をしていないが、心の中は惨めでした。だからイエス様に望みを託したのでしょうか。

このように聖書を読みたいと言う人、教会に行ってみたいと言う人、クリスチャンに関心を持っている人は、そうとう求道心のある人であると見てよいでしょう。日本でキリスト教への関心層は、だいたい1割と言われます。私たちが感じているよりかなり高い割合です。こういう人と出会ったら、その人をぜひ紳士的に追い求めましょう。救いに導かれる確率が高いからです。聖霊もこういう人々がクリスチャンと出会えるように、さらに教会に來られるように働きかけておられます。ならば私たちは、その働きかけに用いられる働き人にさせていただくのではないのでしょうか。求道心を持った方を掘り起こすために用いられたいのです。証しをする心と心が燃やされます。皆さんの周りにはザアカイのように求道心

を持った方がひとり以上いると見てよいでしょう。きょう、誰の魂を追い求めたいと思いましたか。

二、神は人を求めておられる

人々はザアカイを〈罪人〉と呼んで嫌っていました。しかしイエス様はザアカイを〈失われた者〉と呼びました。これは神のもとから迷い出て、居るべき所に居ないという意味です。ジグソーパズルのワンピースがなくなっているように。人々の目には彼は〈罪人〉としか映らなくても、主の目には〈アブラハムの子〉でした。主は神様のために役立ち得る人と見ていたのです。イエス様を信じた人は、どんなに自分が足りない者だと思っても、必ず神様から賜物をいただいており、誰かのために役立つことができます。

しかも主は〈今日、あなたの家に泊まることにしている〉、イエス様はエリコの町に来る前から、ザアカイの家に泊まることに決めておられました。ザアカイが主を求める前に、主がザアカイを求めておられたのです。私たちも生まれる前から救いの計画に入っていました。私たちがイエス様を選んだのではなく、主が私たちを選んで下さったところにクリスチャンの確かさがあります。

次にザアカイは爆弾発言をします。〈主よ、ご覧ください。私は財産の半分を貧しい人たちに施します…〉、ここには、自分の財産を蓄えることに汲々としていたこれまでのザアカイとは全く違う姿があります。同席していた取税人仲間や家族や弟子たちは耳を疑ったことでしょうか。どうして彼がこのように変わることができたのでしょうか。それは〈ザアカイ、急いで降りて来なさい…〉とイエスさまから招かれたからです。イエスさまは一言もザアカイを責めてはいません。食事は和解の証しです。イエスさまから全面的に受け入れられたとき、おのずから悔い改めが起こったのです。人は愛なくして責められたら反発しますが、寛大に受け入れられたら、もう悪いことはしまいと強いられても自分から行動を変えらるものです。律法で自分を変えることはできませんが、恵みで迎えられたら自分を変える力が湧いてきます。

結論

イエスさまは私たちに和解の手を差し伸べ、一緒に生きて行こうと誘っておられます。恵みによって生かされているのですから、恵みによって人と関わりましょう。

研究資料

(宮澤清志)

単元のテーマは「キリストとの出会い」。福音書には、キリストと出会って変えられた人々の物語が数多く描かれている。彼らのキリストとの出会いの仕方もある結果も、それぞれ異なっている。しかし、彼らは皆キリストに出会って変えられた人々であった。この個所を語るにあたって、私たちとキリストとの「出会い」をもう一度考えてみたいと思う。

テキスト

1 エリコ 死海に注ぐヨルダン川の河口から北西約16kmに位置し、対岸のヨルダン方面からの交通の要衝であった。ローマ時代に関税所があった。ここでの徴税人は、ローマ政府より関税徴収を請け負っていた。

2 ザアカイ 「きよい人」「義しい人」といった意味の名前。彼の特徴を聖書からいくつか書き記しておく、①彼は取税人のかしらであった(2)。エリコの町は地理的な交通の要衝であったうえに、ローマにとっても重要な地であり、この町の取税人のかしら、すなわち税務

署長であったであろうザアカイは、莫大な財をなしたであろうと推測される。②彼は背が低かった(3)。③彼の名は聖書中ではこの個所のみであるが、彼はその後、カイザリヤの司教(監督)になったと言われている。

4 いちじく桑 果実はいちじくのように、葉は桑のような木。特徴として、枝が低いところから広がっていることがあげられる。従って、ザアカイは容易に登ることができた。

5 ザアカイ、急いで降りて来なさい イエスはザアカイの名を知っておられた。しかも、その主導権はイエスのほうにあった。イエスご自身からザアカイの名を呼ばれたのである。今日 ルカによる福音書は、この言葉を単なる時間的な意味での「今日」として用いるのではなく、救いが時間の中にやってきたという驚くべき真実と、目の前の出来事が誰のためのもののかを示す意味で、非常に重要な意味を持つている言葉として用いている。**あなたの家に泊まることにしているから** 直訳は「泊まらねばならない」という非常に強い断定的な表現。ザアカイの救いのためにそうせねばならない、という神の定め、神の御旨(みむね)の表れ。

7 人々 泥棒と同じような取税人のかしらであるザアカイの家に泊まるなどということは、ザアカイから常日頃だまされている住民たちにとっては信じられないことであつたに違いない。しかし、イエスは「罪人の仲間」(7・34)なのである。

8 立ち上がり(ギ)ヒステミー この語は第一義的には(ある場所に)立つこと、あるいは立つという姿勢を指す言葉と理解されるが、「定める」「決心する」という意味もあわせ持つ言葉である。彼の語った次の決意の言葉と絡めると、イエスとの出会いが彼を決心させた、と見ることもできる。主よ、ご覧ください。… 律法によれば、賠償は、自発的な弁償の場合は、損害額に四分之一を加えた額を弁償し、また盗品がもとのままで返された場合は二倍、また意識的な強盗の場合は四倍から五倍の弁償を求めている。ザアカイの申し出はこの律法の要求以上の弁償であつて、ザアカイの悔い改めの実である。罪人の家に立ち寄り、温かい交わりをもつてくださるイエスの愛は、その人に罪を自覚させ、悔い改めへと至らせる。

9 今日、救いがこの家に來ました 5節参照。特にこ

の文では、救いが「家」に來たことに注目したい。ルカ福音書において、救いはしばしば個人ではなく「家」に來るといふ表現がなされる。ザアカイに家族がいたのかは分らないが、一人の人の救いは、ルカにとつてはその家全体の救いにつながるということなのであろう。

アブラハムの子 ルカにとつて、アブラハムの子であるということとは、ユダヤ人であるという事実以外に、神の救いの計画に基づくアブラハムの子という意味がある。このアブラハムの子を何によつて判定するか、ということに関しては、ユダヤ教とキリスト教の長い対立の歴史がある。ユダヤ教ではそれを血統と割礼とに見てきた。しかし、キリスト教では、この問いはアブラハムと同じ信仰とわざとに見る。

10 人の子は、失われた者を捜して救うために來たのです 今回の中心聖句であり、イエスの使命の本質を指す言葉である(5・32)。そして、失われた者たちにイエスが引き起こされるのは「悔い改め」である。

参考図書 加藤常昭編訳『説教黙想集成2』『福音書』(教文館)他

聖書

ヨシユア1:1-9

タイトル

ヨシユア① 雄々しくあれ

暗唱聖句

強くあれ。雄々しくあれ。

目標

ヨシユア1:6
信仰の戦いのために、み言葉による備えをする。

導入

(和田牧子)

みなさんは、幼稚園や学校で、勇気が欲しいな…と思う時がありますか？ クラスが新しくなったときとか、苦手な飛び箱に挑戦するときとか、何かのリーダーに選ばれたときとか…。自分にはできるかな？ と心配や恐れでいっぱいになってしまいうことがあってもいいですね。今日はイスラエルの新しいリーダーに選ばれたヨシユアさんのお話です。

新しいリーダー

イスラエルの人々は、最初のリーダー、モーセを先頭に、奴隷として苦しんだエジプトから脱出し、何と40年もの旅を続けてきました。そしていよいよ神様が約束してくださった地カナンを目の前にしたにもかかわらず、

モーセが亡くなってしまったのです。さあ、イスラエルの人々はこれからどうやって旅を続けていけば良いのでしょうか？

しかし神様はちゃんと新しいリーダーをご用意くださっていました。その名前はヨシユアです。ヨシユアは若い時からずっと神様に忠実にあゆみ、モーセのお手伝いをしてきた人でした。

こんなことがありましたよ。ある時モーセに命じられて、仲間といっしょにカナンの地がどこなところか調べに行ったのです。すると仲間の多くは「モーセさん、無理です！ 私たちには手に負えません。引き返しましょう！」と訴えました。カナンの地の人々は強そうで、町の城壁は大きく、とてもそこに攻め入ることなんて出来ない！ と思ったのです。しかしヨシユアとカレブだけは「神様が私たちとともにおられます。彼らを恐れてはなりません！」と信仰をもってはっきりと言いつつたのです。

神様の励まし

神様はそんなヨシユアをイスラエルの次のリーダーにお立てになりました。そして「今、あなたとこの民はみ

な、立つてこのヨルダン川を渡り、わたしがイスラエルの子らに与えようとしている地に行け！」とお命じになりました。

みなさんがヨシユアの立場ならどうでしょう。モーセはリーダーとしてイスラエルの民を導く中で、何度も困難にあつてきました。イスラエルの人々は長く厳しい道のりの途中、何度も愚痴をこぼしたり、文句を言ったり、「こんなことならエジプトにいたほうが良かったです」と嘆きました。そんな人々の先頭に立つて若いヨシユアが力強く人々を引っ張っていくためには、よほどの信仰と勇気が必要だったでしょう。

そんなヨシユアに神様は何度も励ましの言葉をかけておられます。

「わたしはモーセとともにいたように、あなたとともにいる。わたしはあなたを見放さず、あなたを見捨てない。」「強くあれ。雄々しくあれ。恐れてはならない。おののいてはならない。あなたが行くところどこでも、あなたの神、主があなたとともにおられるのだから。」

何と心強い神様のお言葉でしょう！ 天地を創造され、人間を創造された何でもおできになる神様がともに

いてくださるというなら、怖いものは何もありませんね。ヨシユアは真のリーダーは神様だと確信して、勇気100倍、イスラエルのリーダーとして立ち上がりました。

み言葉を忘れないで

この時神様は、戦いに勝利する一つの秘訣を教えてくださいました。それは、神様のみ教えを忘れないということでした。神様のみ言葉を離れて右にも左にもそれてはならないと、ヨシユアとイスラエルの人々に言われたのです。神様の約束の言葉を口から離さず、昼も夜もそれを想う：そうすれば必ずあなたがたは勝利するでしょうと。

神様のみ言葉を心にとめ、その教えを守ること、神様がともにいてくださることは切っても切れないほど結びついているのですね。

結び

今を生きる私たちには、復活されたイエス様がともにいてくださいます。聖書を読むと神様が私たちをどれほど愛し、励ましてくださっているかがわかります。イエス様の力をいただいて、力強く進んでいきましょう！

♪おおしくあれ♪（ホ106、イン77、新聖歌486他）

聖書 ヨシユア1・1～9 テーマ ヨシユア① 雄々しくあれ

序論

(高橋頼男)

出エジプト以来、今日に至るまでのイスラエルの歴史と歩みは、モーセという偉大な指導者なしにはありえなかったことです。しかも、今まさに約束の地へ進入しようとしている大事な時でした。このような時、モーセの死は決定的な影響を与える出来事でした。

一、モーセの死は、新しい前進の始まり(2～4)

モーセを失った今、一大民族となったこの民を誰が担い、持ち運び、正しく導くことができるでしょう。ヨシユアをはじめ民は皆、不安になりました。しかし、モーセの死は、神のご計画のうちにありました。そして、モーセを通して約束したが、モーセが生きている間はできなかったことを、神は今、後継者を立てて成し遂げようとしておられるのです。そこには、神がすでに準備しておられるご計画があり、神はそれを熱心に果たそうとしておられたのです。そのため神が選り備えておられたのが、モーセの従者、ヌンの子ヨシユアでした。

神は、ヨシユアに命じました。〈今、あなたとこの民はみな、立ってこのヨルダン川を渡り、わたしがイスラエルの子らに与えようとしている地に行け。わたしがモーセに約束したとおり、あなたがたが足の裏で踏む場所のことごとく、すでにあなたがたに与えている〉と。神のご計画しておられる聖業には、遅れや中途半端、挫折はありません(ピリピ1・12)。また、神のご計画は必ず速やかに進められなければならない。

二、雄々しく、強くあれ(6、7、9)

主は、ヨシユアを繰り返し励まされました。指導者として大切なことは、堅く立って動かされず、強くかつ勇敢であることです。しかし、現実にはどんな人でも恐れがあり、おののきがあります。ヨシユアも例外ではありませんでした。

「彼は神と人からの、ありとあらゆる励ましと鼓舞を必要としていた。『強くあれ』とは、彼が弱さを感じていたことを意味する。『雄々しくあれ』とは、彼がおびえていたことを意味する。『おののいてはならない』とは、途中で仕事を放棄してしまうのではないかと彼が本気で考えていたことを意味する。彼は虫であって、人ではない」

(F・B・マイヤー「ヨシユアの生涯」)。ヨシユアに与えられた任務は、民を導いて約束の地に入り、その地を戦い取って嗣業の地として民に分け与えることでした。自分にそのような能力があるのか、勇気と覚悟をもって最後までそれをやりぬくことができるのか不安でした。しかし、神はすでにヨシユアに召しと賜物を与えておられました。(「わたしはモーセとともにいたように、あなたとともにいる」と。彼が信頼して従う限り、神ご自身の力強い臨在を約束されたのです。

私たちの闘いは、この世にある信仰の闘いであり霊的闘いです。人々にキリストを証しし、福音を宣べ伝え、人々の魂をキリストに勝ち取ることです。個人でも教会でも私たちが行つて戦い取るべき、あなたが(足の裏で踏む)べき多くの嗣業の地があります。そこには多くの困難や問題、激しい霊的戦いがあります。しかし、ヨシユアを励ましてくださった主は、私たちをも励まし、共にいて勝利を与えてくださるのです。恐れおののくことなく、主に信頼して前進しましょう。

「世にあつては苦難があります。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝ちました」(ヨハネ16・

33)。「見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます」(マタイ28・20)。

三、全ての律法を守り行え(7〜8)

神はヨシユアを励まされただけでなく、ヨシユアと民が律法の全てを守り行うこと、右にも曲がらず左にもそれず、主の律法に従つてまっすぐ進むことを命じました。明確な指針、決断のための確かな基準、力は、真理である神にあります。

そのために、律法が絶えず語られること、律法を昼も夜も思い巡らすこと、律法を状況の中で実践することが強調されました。み言葉を語り、黙想し、適用して実践することです。(「そのとき、あなたは自分がすることである繁栄し、あなたは栄える」と神は約束されました。

今の時代、私たちがみ言葉を守り行うことは決してやさしいことではありません。勇気が必要です。しかし、そこにこそ神の祝福があることを信じましょう。

結論

すべてのことが、かえつて聖業の前進となることを信じ、恐れず勇気を持ち、神のご臨在とみ言葉に信頼して私たちの戦いを立派に戦いぬきましょう。

研究資料

(宮澤清志)

テキスト

1 この節は、申命記とヨシユア記をつなぐ役割をもつ節である。ヨシユア記全体の緒論としての意味も併せ持つ箇所でもある。モーセの従者、ヌンの子ヨシユアこのヨシユアは出エジプトの最初からしばしばモーセとともに登場し、特に重要な局面では「モーセの従者」としての役割を果たしていた(出エジプト17・8～9、24・13、33・11、民数記11・24～29等)。このようにヨシユアは40年にわたる荒野での生活の中で訓練され、時いたってモーセの後継者として神ご自身によって立てられたのである。ヨシユアという名は、ギリシャ語で「イエス」となり、「主は救い」という意味を持つ。

2～3 この箇所には、5・12までにみられるヨルダン渡河と、5・13～12・24までに記されているいわゆる「征服」の箇所についてのあらましとが記述されている。

2 わたしのしもべモーセは死んだ ことの詳細は申命記34章を参照。現実を見、それを把握することは、主の民にとって避けて通ることのできないことである。同時

にこのことは、ヨシユアがその指導性を発揮できるようになるための神の愛と配慮に満ちた語りかけでもある。与えようとしている 2節の「与えようとしている」は分詞であり、この言葉の背後には、神がその民に課そうとしている働きの意図が含まれている。すなわち、約束の地は、神からの恵みの賜物として描かれる。しかし、この恵みの賜物をいただくためには人間の側で「ヨルダンを渡る」ことと「足の裏で踏む」という二つの条件が示される。神は土地を約束された。しかし、それはタナボタ的に与えられるという約束ではない。民は与えられた土地を獲得するために戦わなければならないかったのである。一方、3節の「与えている」は完了形であり、神のご摂理の中では、領土はヨシユアの手に渡してしまっているのである。天においては既にこの行為は完了してあるのである。あとは地上においてヨシユアの手によってそれを完成させるのである。

4 この記述は、並行記事として申命記11・24～25にある。特にこの節の理解に関しては、教会などに聖書地図がある場合はそれらを開きながら読むことをお勧めする。**荒野** ある限定した「荒野」(シナイの荒野のような)

という意味ではなく、ヨルダン川西岸とその南側の地域の一般的名称。レバノン パレスチナ北部にそびえるシリヤの山脈地帯。ヒッタイト人の全土 申命記11・24にはこの記述はない。大海 地中海のこと。

6 強くあれ。雄々しくあれ この節のほかにも1・7、9、18にも繰り返し登場する言葉であり、ヨシユアを持つ責任を強調する言葉である。またヨシユアは申命記31・6、23でも同様の言葉をかけられている(31・6はモーセを通して)。また同様の言葉はダビデがその子ソロモンに(歴代上28・20)、またヒゼキヤがその民に対して(歴代下32・7)語っている。いずれも神の臨在と支えの言葉とが対になって語られている。ヨシユアはイスラエルの民を約束の地へと導くために、強く、雄々しくあらねばならない。しかし、それは単なるカラ元氣、カラ勇氣の類ではなく、神が共にいてくださるが故の勇氣である(5、9)。

7～9 この節では、ヨシユアがイスラエルの民を約束の地へと導くための秘訣が示される。この節を通して、ヨシユアがモーセの律法への従順を欠いてはこれのことなをせないことを示している。ヨシユアが神の律法へ

の黙想と服従とを第一としない限り、彼の指導は失敗に終わるであろうことを示唆している。

7 わたしのしもべモーセがあなたに命じた律法のすべてを守り行うためである 申命記5・31～32、27・1、28・14等に登場する、申命記的律法の大きなテーマである。

8 ヨシユアは律法への従順を欠いてはこれらのことはなすことはできない。ヨシユアが神の律法への黙想と服従とを第一のこととしない限り、彼の指導は失敗に終わることになる(ヨシユア23・6、詩篇1・1～3)。

9 「主」があなたとともにおられる 主がモーセに語られた言葉と同じ言葉であり、信仰者にとってはこの言葉によって支えられ、また勇氣づけられる(出エジプト3・12、イザヤ43・2～5、マタイ1・23他)。

参考図書 リチャード・S・ヘス『ティンデル聖書注解ヨシユア記』(いのちのことば社) 他

聖書

ヨシユア3・1〜17

タイトル

ヨシユア② 約束の地

暗唱聖句

イスラエル全体は乾いたところを渡り、
ついに民全員がヨルダン川を渡り終えた。
ヨシユア3・17

目標

神が約束し、導かれたところに、信仰によって進み入る。

導入

(和田牧子)

先週はイスラエルの人々に新しいリーダー、ヨシユアさんが立てられたお話でしたね。あの後イスラエルの人々はすぐに、勇ましく約束の地に踏み込めたのでしょうか？ いえいえ、まだいろいろな困難が立ちはだかっていましたよ。

ヨルダン川を前に

ヨシユアとイスラエルの人々は、ヨルダン川という大きな川の岸辺を目の前にしていました。ヨルダン川は刈り入れの時期で水かさが増していました。刈り入れの時期とは4月の初めごろで、山から雪どけの水が流れてきて、岸まであふれるほどだったのです。みなさんの家の

近くに大きな川はありますか？ 大雨が降ったあとには物すごい水かさが増しているときがありますよね。イスラエルの人々もそのようなヨルダン川を前にして、「この川をわたるの？ そんなの無理だ！」と思ったことでしょう。またまた大ピンチです。

イスラエルの人々の中には沢山のお年寄り、女性、子どもたちもいましたし、動物たちもいたのです。橋もないあふれんばかりの川をどうやってわたるのか……。しかし神様の方法は不思議です。ヨシユアは祭司さんたちに言いました。「契約の箱をかつぎ、人々の先頭に立ってヨルダン川をわたるなさい。」契約の箱の中には、十戒という神様からの約束の言葉が書かれた石の板が入っています。とても大切な神様の聖なる箱です。

続いてヨシユアは祭司さんたちに言いました。「ヨルダン川の水ぎわに来たら、川の中に立ち続けなさい。」えっ？ ジャバジャバと水の中に入って行って、契約の箱をかついだまま立ち続けるの？ おぼれてしまわない？ こわいですよね。ヨシユアはこんどはイスラエルの人々に言いました。「ごらんなさい。契約の箱が、あなたがたの先頭に立ってヨルダン川をわたろうとしてい

ます。祭司たちの足のうらがヨルダン川の水の中にとどまるとき、水はせきとめられ、うず高く止まるでしょう。」

そうなのです。今までも、イスラエルの人々がエジプトから約束の地カナンをめざして旅を続けるるとき、神様はたくさんの奇跡をなさいました。葦の海（紅海）が真つぷたつに分かれて道ができたり、食べ物を与えられたり、毒へびにかまれたときにいやされたり……。人間の頭では予想もできないような不思議な方法で、神様はイスラエルの人々をピンチから救い出してくださいました。

ヨルダン川を渡る！

いよいよ契約の箱をかつぐ祭司さんたちが前に進み始めました。祭司さんたちが川に足をふみ入れたその時です！ 川の水が上流のはるかかなた、アダムという町のあたりでうず高く立ち、完全にせきとめられたのです！なんと、川の中にかわいた道ができたのです。

イスラエルの人々はみな喜びの声を上げながら、なにも心配しないで向こう岸にわたることができました。その間、契約の箱をかついだ祭司さんたちはずっと乾いた地に立ったままでした。そしてすべての人々がわたりきると、川の水はもとのように流れ始めました！

きよくあること

このすばらしい奇跡が行われたとき、イスラエルの人々には神様から大切なご命令が与えられていました。契約の箱についていくとき、箱との間に2千キュビト（900m）の距離をおき、箱にちかづいてはならないというものでした。そしてしっかりと身体をきよめるようにというご命令でした。イスラエルの人々は神様をおそれうまい、身体だけでなく心の中もきれいにしていたでいて、神様についていくことを求められたのですね。契約の箱は神様がともにいてくださることにしるしでした。「先頭に神様が進んでくださっている！」「神様がともにおられる！」と、信頼をもつて進むとき、恐れや不安は安心や勇気へと変わっていきます。

結び

わたしたちも、これからの人生で困難にあったり、どうしよう!?と思うことがあるでしょう。そんなとき、「神様、どうしたらいいですか?」とお祈りしてみましょう。神様が前に進む方法を教えてくださいますよ。私たちは、信じて一歩をふみだせばよいのです！

♪信仰はなんてすばらしい♪（GS 25）

聖書 ヨシユア3・1～17

テーマ ヨシユア② 約束の地

序論

(高橋頼男)

神の命令によって、いよいよ約束の地に入ろうとするヨシユアとイスラエルの民ですが、そのためには、どうしてもヨルダン川を越えなければなりません。ヨシユア3章は、ヨルダン渡河^との驚くべき記録です。〈生ける神があなたがたの中にいて、自分たちの前からカナン人、エブス人を必ず追い払われることを、あなたがたは次のことで知るようになる〉とあるように、この大いなる不思議を伴うヨルダン渡河は、続く約束の地「カナン」進入のための試金石でした。

一、不思議を行われる神(1～13)

シテイルからヨルダンにまで来た民は、そこで三日間留まりました。この間、ヨシユアは何をしていたのでしょうか。満水の雪解け水をたたえて勢いを増して流れるヨルダン川を眼前に、思案していました。一行の中には、女、子ども、老人、そして、たくさんの家畜がいましました。これらを伴って、ヨルダン川を渡るのは、並大抵

のことではありません。どうしたらよいかわからず、ただ、神のお言葉を待つばかりませんでした。その時、神はヨシユアに語られたのです。〈あなたは契約の箱を担ぐ祭司たちに『ヨルダン川の水際に来たら、ヨルダン川の中に立ち続けよ』と命じよ〉と。神の箱を担ぐ祭司たちの足の裏が、ヨルダンの水の中に踏みとどまる時、ヨルダンの水は流れをせき止められ、上から流れくだる水はとどまって、うず高くなると言われたのです。神のみ言葉を聞いたヨシユアは、民に〈明日、主があなたがたのただ中で不思議を行われる〉と言いました。「不思議」とは、驚くべき事柄、神のなされる奇跡のことです。かつてエジプトにおいて、主がモーセを通してなされた数々の奇跡(出エジプト3・20)を思い起こさせました。私たちが仕えている主は、生ける力ある神であって、昔も今も不思議を行われるお方です。

二、全き信頼と服従(14～17)

神の不思議は、み言葉への全き信頼と服従があつてこそなされます。祭司がヨルダン川の水の直前まで来ても、奇跡は起こりません。その足が一步踏み出し、実際に水の中に浸るその瞬間、不思議は起こったのです。

「箱を担ぐ者たちがヨルダン川まで来たとき、…箱を担ぐ祭司たちの足が水際の水に浸ると、川上から流れ下る水が立ち止まった。…完全にせき止められ」た。奇跡が起きてから川を渡るのではなく、信仰の行いが先に必要なのです。川の水が未だ兩岸に満ちている時、足を水に踏み入れることは難しいことです。しかし、信仰とはまさにそのことなのです。聞いたみ言葉に信頼して従うことです。大切なのは、現実がどうであるかではなく、み言葉がどう語られているか、ということです。神は状況を造り出し、支配し、またその状況を変えることができるお方です。

「信仰も行いが伴わないなら、それだけでは死んだものです」。「信仰がその行いとともに働き、信仰は行いによって完成されました」(ヤコブ2・17、22)。

三、神を畏れ自らを清くする(3-5)

民は、自分たちの先を行く主の契約の箱に従っていくこと、その神のご臨在を表す聖なる契約の箱との間にはおよそ二千キュビト(900m)の距離をおき、それに近づいてはならないことをも命じられました。聖なるもの、聖なるお方を畏れるべきことが教えられたのです。

さらに、(あなたがたは自らを聖別しなさい。明日、主があなたがたのただ中で不思議を行われるから)と、神の驚くべきお働きを目の当たりに経験する民は、清くあるべきことを命じられました。このきよめは、外面的、実際的には身をきよめ、衣服を洗い、女性から身を慎むことを指したようですが、内面的には、真に神を畏れ、不信仰や高慢を取り去り、主の前に徹底してへりくだり、全き信頼を主にささげることです。聖なる神のくすしい御業にあずかるためには、民は、自身のあらゆる汚れや不遜から聖別されるべきことが命じられているのです。

このようにして、ヨシユアと民はヨルダンを渡りました。神が先立ち、驚くべき不思議をもつて道を開いてくださったのです。神の約束の地を獲得していくことは真に困難な戦いですが、必ず神が先立つてくださり、道を開いて下さることを信じることができました。

結論

神が命じられる道には必ず困難があります。しかし、不思議を行われる神を信頼し、自らをきよめ、大胆な服従をもつて前進しましょう。そして、神の約束されている嗣業の地を獲得していきましょう。

研究資料

(宮澤清志)

本章とそれに続く第4章とは、イスラエルのヨルダン渡河の準備から完了に至るまでの物語である。特に本章では渡河の準備と(1～13)、川における奇跡の報告(14～17)とで構成される。

テキスト

3 契約の箱 詳細は出エジプト25・10～22にある。契約の箱は最も重要な祭具で、聖所全体の中心ともいえるものである。この箱は神の臨在のしるしとみられた。レビ人の祭司たち レビ人は、古代イスラエルにおいて特に神に近く仕えたとされた集団である(民数記3・12、8・16等)。本節のように、神の契約の箱をかつぐのは、レビ人の務めとされていた(ヨシユア8・33)。

4 二千キュビト 約900メートル。一キュビトは約45センチメートル。イスラエルの民が聖なるものに近づきすぎることは危険であると信じられていたのである(サムエル下6・1～11)。

5 自らを聖別しなさい 聖別するとは(ハ)カード・シユ・切り離す、という意)、自分自身をこの世のあらゆるものから切り離して神のものとする、という意味をもっている。具体的には着物を洗うことと、性的関係を慎むことなどが含まれていたと考えられる(出エジプト19・10～25)。しかし、何よりもまず、自らの身をもって神を信頼するという行為が求められていた。不思議 奇跡のこと。それによって主がその力を示される、不思議な、あるいは恐るべき出来事を指している。なお、新共同訳では「驚くべきこと」と訳している。

6 前節に「明日」とあることから、前節の翌日のことであろう。 ヨルダン渡河はここから始まる。

7～8 先週見たヨシユアへの主の語りかけ(1・1～9)に続く主の語りかけである。 神の臨在の約束(7)とヨシユアへの指示(8)という内容は、1・1～9にも見られたものである。不思議(5)すなわち奇跡の意図は、神がモーセといたように、ヨシユアとともにいることをすべてのイスラエルの前に知らせること(7)であった。この点においても、モーセとヨシユアとの類似性を見ることができる。

10 神は、約束にしたがってカナンの地をイスラエルに渡される。 10節には、その原住民のリストが描かれている。

る。このリストは、創世記15・19～21、出エジプト3・8、17、23・23、33・2、34・11、申命記20・17他にも登場する。**カナン人** 旧約聖書においてはしばしばイスラエルによる征服前のパレスチナの住民の総称として用いられた(創世記12・5～6)。**ヒッタイト人** ヒッタイト帝国の残存民の一部(1・4参照)。**ヒビ人** カナン中央のシケム、ギブオン周辺をその主な居住地としていた。彼らはヨシヤを欺いて和を講じ、滅ぼされることを免れた唯一の民族である。**ペリジ人** カナンびとと並んでしばしばカナン先住民の代表としてあげられていた。**ギルガシ人** カナン先住民の一つであるが、はっきりしたことはわからない。**アモリ人** パレスチナ中央部の先住民の名。**エブス人** 山地にすんでおり、ダビデ時代にはエルサレムの町を支配していた民族である。ちなみに「エブス」とはエルサレムの別称である。**生ける神** 原語には定冠詞がついており、周囲の民の神々のように死んだ神とは区別することを意図して用いられた言葉であろう。

11 全地の主 神はこの地上のすべてをご支配される神である。神はヨルダンの川をも支配される神であるとい

うことを言外に語っている。

12 詳細は4・2以下を参照。

13 本節において神の「不思議」が明らかとなる。

14 17 13節で語られた主の「不思議」が具体的な出来事として展開される。この個所の中心はイスラエルの民ではなく、「祭司たち」である。

14 契約の箱を担ぐ祭司たちは民の先頭にいた 主の戦いにおいては、いつも主が先立たれる。この奇跡も、主の臨在の象徴である契約の箱が先立って進んだ。

15 ヨルダン川は刈り入れの期間中で、どこの川岸にも水があふれていた 刈入れの時期とは4月初旬のことであって、この時期はヘルモン山からの雪解け水でヨルダン川は岸まであふれており、ヨルダン川の流れも非常に激しかった。

16 アラバの海、すなわち塩の海 死海のこと。

17 こうして、出エジプトと同じ出来事が起こったのである(出エジプト14・21～22、29)。

参考図書 11月7日分と同じ。

聖書

ヨシユア24・14～15

タイトル

ヨシユア③ 神に仕える決心

暗唱聖句

私と私の家は主に仕える。

ヨシユア24・15

目標

自覚的な選択をもって神に仕える決断をする。

導入

(土屋開夫)

皆さんはイエス様を信じていますか？ 勿論、信じて

いますね。じゃあ信じているという子は、「なんとなく」信じてますか。それとも、「しっかり」信じてますか？

「なんとなく」信じるというのは、例えば「お母さんもイエス様を信じてるし、教会の他の人たちも信じてるし、信じないより信じる方が良さそうだから信じてる」という感じです。逆に、「しっかり」信じるというのは、「たとえ、周りの他の人たちが信じてなくても、ボクはイエス様を信じる！ 今だけじゃなく、一生、信じ続ける！」そう心に決めている信じ方です。どうですか。

ヨシユアさんのこれまでの歩み

今日は、ヨシユアさんが改めて、そんなしっかりした信仰の告白をした場面です。ヨシユアさんも、もうだいたいぶ歳をとって、おじいさんになりました。そこでイスラエルのみんなを集めて、最後のメッセージを語りました。

ヨシユアさんのこれまでの歩みを簡単に振り返ってみましょう。

ヨシユアさんは若い時からモーセさんに仕えて、一緒に神様の偉大さを体験してきましたね。神様が自分たちを奴隷だったエジプトから救い出してくださったこと、海を真つ二つに分けて道を開いて下さったこと、荒野を旅した40年の間も天からのマナをもつて養ってくださったこと。

そしてモーセさんが死んで天国に行った後は、ヨシユアさんはリーダーをバトンタッチして、とても不安だったと思いますが、神様から「わたしはモーセとともにいたように、あなたとともにいる。わたしはあなたを見放さず、あなたを見捨てない。強くあれ。雄々しくあれ。」(1:5～6)と、力強い励ましの言葉をいただきました。

そしてヨルダン川を奇跡の力で渡らせていただき、敵にもことごとく勝利させていただきました。そして遂に、長年約束されてきたカナンの地を自分たちのものとして与えられたのです！

まず自分がしっかり信じる

ヨシユアさんは、この偉大な神様が今まで自分たちを救い、養い、守り、導いて下さったことを振り返った時、改めて、この主なる神様以外に本当の神様はおられないことを確信しました！そこで改めて、こう信仰の決心を告白しました。「私と私の家は主に仕える」と。

けれども、ヨシユアさんには一つの心配がありました。心の迷いやすいイスラエルの人たちは、いつかまた、他の偶像の神々を拝むようになるのではないかと、と。

残念ながら、私たちは誰か他の人の分まで神様を信じ「あげること」は出来ません。「信じる心」は一人ひとりが持つものだからです。

けれども、自分がまずしっかり神様を信じることによって、他の人の心を照らす「世の光」になることは出来ます。そして、もう一つ、他の人が信じる心を持つこ

とが出来る様に祈ることが出来ます！自分がまず信じていなければ、祈ってあげることも出来ませんね。

ヨシユアさんの信仰の決心を聞いたイスラエルの人々も「私たちもまた、主に仕えます。このお方が私たちの神だからです。」(18)と言いました。

まとめ

今の時代は大変な時代です。嵐(台風)が吹いている様な時代です。嵐の時は、何か丈夫なものにしがみついたり、頑丈な建物の中に避難したりしますね。そのように、今の時代はこれまでに以上にイエス様にしっかりとつかまったり、岩なるイエス様の元にいつもいることが大切です！「なんとなく」信じている信仰では、吹き飛ばされてしまうかも知れません。

どうか、自分のため、家族のため、周りのお友だちのためにも、「私はイエス様を信じ、イエス様に仕えます！」としっかりと決心をしましょう！

♪命のかぎり♪(MEBIGさんび大爆発)

聖書 ヨシユア24・14、15 テーマ ヨシユア③ 神に仕える決心

序論

(高橋頼男)

モーセの後を継いだヨシユアは、不信仰と不従順のイスラエルの民を導いて、ついにヨルダンを渡ってカナンの地に入りました。約束の地における戦いを続け、ようやくカナンの地に民を安住させることができました。

死期が迫ったヨシユアは、全イスラエルを前にし、民の行く末に一抹の不安を抱きつつ、心を込めて決別の説教をしました。そして、最後に「あなたがたが仕えようと思うものを、今日選ぶがよい。ただし、私と私の家は主に仕える」と、自ら主に仕えることを宣言し、民に向かって鋭い信仰の挑戦したのです。

一、決定的な選択

主に仕えるのか、それとも他の神々に仕えるのか、どちらの神を選ぶのか、何を神として仕えるのか、それはまことに決定的な選択です。人間の運命を左右する選択だからです。この選択に、これからの人生が、永遠までもがかかっています。しかも、だれもこの重大な選択を

避けることはできません。本当の神に仕えていない人は、必ず偽りの神を造り出し、それぞれの偶像に仕えるようになるからです。自分のやりたいこと、仕事、お金、知識、肉欲、等々、これらの正体は「自己欲」です。「その人たちの最後は滅びです。彼らは欲望を神とし、恥ずべきものを栄光として、地上のことだけを考える者たちです」(ペリピ3・19)。

私たちが自分のために生きることを始めるなら、必ず、自分自身の弱く不安定な、みじめな罪人としての姿を見せつけられることでしょう。まことの神を選び、真の神に仕える者だけが本当の生き方を発見し、ほんものの喜びと永遠のいのちを神の愛の中に見出すのです。

「今、あなたがたは主を恐れ、誠実と真実をもって主に仕え、…神々を取り除き、主に仕えなさい」。

二、一人一人の選択

神様は人間創造において、一人一人に選択をする自由と権利をお与えになりました。「人間が創造された目的は、愛(です)。人は神と愛し合うため、人間同士たがいに愛し合うために造られたのです。…愛するということとをだれかに強要することはだれにもできません。(強要

された愛は、愛ではありません。)愛は自発的に選ぶものです。裏を返せば、愛することを選ぶことができるということは、愛さないことを選ぶこともできるということです。ここに創造における愛のパラドックス(矛盾)があります。「人が善に傾くか悪に傾くかは、神と人との関係にかかっています。その関係が健やかであるときには、人は善を選びとることができます。逆に、神との関係に問題があるなら、人は悪に傾いていく(悪を選択する)のです(大頭真一『聖書は物語る』傍線と括弧内筆者)。

さざげものにおいて、神との関係における問題が明らかにされたカインは、やがて悪に傾き、悪を選び取ってしまいました(創世記4章)。神を愛し神に仕えるためには、私たちは罪と悪を捨てなければなりません。自分の栄光に別れを告げなければなりません。罪のはかない楽しみに、断固、「否!」と言わねばなりません。神に仕えることは、払うべき代価、背負うべき十字架があるのです。しかし、そこには、永遠の栄光と望みがあります。今までの習慣がどうであろうと、取り巻きの人々がどうであろうと、「あなたは、わたしに従いなさい」(ヨハネ21・22)と言われる主の前に、たとえ一人であっても従っ

ていくのです。これは、わたしがなすべき個人的な選択なのです。

三、きょうの選択

〈あなたがたが仕えようと思うものを、今日選ぶがよい〉。私たちには、自分がしなければならない決断を伸ばして、状況に流されてしまう弱さがあります。しかし、きょう決断しないことは、流されることを決断してしまうことです。また、心が示されていても、ロトのようにためらうことがあります(創世記19・15・16)。だからヨシユアは、〈今日〉と言いました。神様もまた〈今日〉と言われます。「今日、もし御声を聞くなら、あなたがたの心を頑なにしてはならない」(ヘブル4・7)。良いことにおいて決心をする機会は、二度とないかもしれない。悪魔は耳元で「明日」とささやきますが、この機会を逃してはならない時があるのです。「見よ、今は恵みの時、今は救いの日です」(Ⅱコリント6・2)。

結論

〈私と私の家は主に仕える〉と言ったヨシユアのごとく、自覚的な選択と決心をもって主を選び、主に仕えていくものとなりましょう。

研究資料

(金井由嗣)

ヨシユア記と戦争

ヨシユア記を含め、旧約聖書に見られる「聖戦」や「聖絶」の思想については慎重な取り扱いが必要である。本日(ヨシユア記)の箇所とは直接関係ないが、生徒から質問があった際には答えられるように準備をしておきたい。旧約聖書の戦争観についての専門的な研究書としては佐々木哲夫『旧約聖書と戦争』が、聖書全体の戦争観と平和観を学ぶには信州夏期講座編『キリスト者の平和論・戦争論』所収の岡山英雄論文「聖書神学的な平和論・戦争論」がお勧めである。以下の要点を押さえておきたい。①「聖戦」「聖絶」が命じられるときには明確な宗教的意味があり、主によって直接命じられている。②中心的な目的は「神の栄光を表すこと」と神の民イスラエルを偶像礼拝から切り離すことである。復讐や私益を目的とした戦争は固く禁じられている。③イエス・キリストの福音によって救われて神の民に加わる道がすべての人に開かれている。新約の時代には「聖戦」も「聖絶」もありえない。

なお、キリスト教と戦争の関係について歴史から学ぶ

には石川明人『キリスト教と戦争』と土井健司『キリスト教は戦争好きか』を推薦する。

文脈

23〜24章において、自分の死が近いことを意識したヨシユアはイスラエルの民全体に向けて別れの言葉を告げ、神への忠誠を保つよう勧める。この個所の思想と表現は申命記とよく似ている。指導者の勧めを受けて民が契約を結ぶ点も同様である。23章ではヨシユアは個人的に民の指導者たちに語り、24章では主の代理人として公的に民に語り掛け、契約を結ぶ。

テキスト

14 今 2〜13節でヨシユアはアブラハムから出エジプト、カナン定着に至る歴史を回顧し、そのすべてが主の恵みによるものであったことを強調する。その上で、恵みへの応答としてイスラエルが主に仕えることを求める。過去においてイスラエルはしばしば主に背いてきた。その行き方から決別する意味で「今」決断が迫られる。聖書協会共同訳は「今こそ」と強調して訳す。あな

たがたは「主」を恐れ： 四つの命令文が連続している。

「主を恐れなさい」「主に仕えなさい」「神々を取り除きなさい」「主に仕えなさい」「仕える」〔ヘ〕アーバドは14～15節で7回用いられている。信仰とは観念ではなく、実際の行動において神に「仕える」ことであり、その行動は主を「恐れる」基本的態度から出てくる。主に仕えることとはほかの神々に仕えることとは決して両立できない。誠実と真実をもって 新改訳で「誠実」、聖書協会共同訳で「真心」と訳された言葉は〔ヘ〕ターミームで、普通は「完全」と訳される。この個所では前置詞〔ヘ〕ベが付いた形で（内面と外面との対応において）「欠けることなく」の意味になる。「真実」は〔ヘ〕エメト。同じ前置詞がついた形で、言葉に表したことを実行する誠実さを意味する。主に仕える人には内面と外面、言葉と行動の一致における誠実さが求められる。

15 「主」に仕えることが不満なら 申命記と同じく、ここでは主に仕えることは民の選択にゆだねられている。真実な献身は強制によつては生まれない。神の恵みに対する主體的な応答が求められているのである。あの大河の向こうにいた、あなたがたの先祖が仕えた神々で

も、今あなたがたが住んでいる地のアモリ人の神々でもエジプトでの偶像礼拝の習慣は民に染み付いていた。また民数記25章にはモアブの神々への礼拝にイスラエルが加わった事例が記されている。カナン定着後にも先住民の偶像礼拝がイスラエルに入り込む危険は予期されていた。ただし、私と私の家は「主」に仕える 民に選択をゆだねたうえで、ヨシユア自身とその家族（子孫）とは主に仕え続けることを宣言する。主語「私」が強調されており、「他の人々がどうあっても私は」とのニュアンスで語られている。信仰を同じくするはずの仲間がこの世と妥協して信仰を曲げた場合、少数者となっても神への信仰を貫く人が真の信仰者である。

参考図書 R・S・ヘス（ティンデル）、M.H. Woudstra (New International Commentary)、佐々木哲夫『旧約聖書と戦争』、信州夏期講座編『キリスト者の平和論・戦争論』、石川明人『キリスト教と戦争』、土井健司『キリスト教は戦争好きか』。

聖書

ルカ1・26〜38

タイトル

マリアへの告知

暗唱聖句

私は主のはしのためです。どうぞ、あなたのおことばどおり、この身になりますように。

ルカ1・38

目標

神のご計画に従い、従順に生きることに幸いを知る。

導入

(和田牧子)

今年も昨年が続いてコロナウイルスのために大変な一年だったと思います。今年もあとわずか。早アドベントを迎えました。アドベントとはイエス様のお誕生を待ち望む特別な期間のことです。教会の礼拝堂に4本のろうそくを立て、一週間ごとに一本づつ火が灯ります。何だか心も身体もあったかくなる気がしますね。

神様の選び

今日のお話の登場人物は、マリアという名前の女の人です。女の人というよりも、少女といったほうがよい十代半ばだったようです。ナザレというガリラヤの小さな町に住んでいました。マリアは神様を信じる心やさしい

人でした。そしてもうじきうれしいことが待っていました。大工のヨセフと結婚するのです！ヨセフも神様を信じる信仰深い人で、二人は結婚の日を指折り数えて過ごしていました。

天使のみ告げ

そんなある日のことです。マリアのところにみ使いガブリエルが来て言いました。「おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます！」マリアはびっくりして、これはいったい何のあいさつかしら？と胸をどきどきさせました。するとみ使いは言いました。「恐れることはありません。あなたは神から恵みを受けたのです。見なさい。あなたのお腹には赤ちゃんが与えられ、男の子を産みます。その子をイエスと名づけなさい。」

みなさんだったらどうですか？いきなりこんなことを言われたら驚きますよね。マリアは思わず「どうしてそのようなことが起こるのでしょうか。私はまだ結婚していませんのに！」と言いました。もうすぐヨセフと結婚する予定ではありますが、もうすでに子どもがお腹にいるとは……！

しかしみ使いはこう教えてくれました。「聖霊があな

たの上へのぞみ、神様の力があなたをおおいいます。ですから生まれる子どもは聖なる方、神の子と呼ばれます。あなたの親せきのエリサベツも、大変年を取っているのに男の子を宿しています。神様にとってできないことは何もありません！」

マリアの信仰

マリアはみ使いの言葉を聞きながら心の中でいろいろと考えたでしょう。ヨセフやみんなはどう思うだろう。「裏切り者！」と、ヨセフは私から去っていくかもしれない。また人々からは「不倫の女！」とののしられ、石打ちの刑で殺されるかもしれない。どうしたらいいのかしらと思いつくうちに、マリアは信仰の目を上げました。人の目を気にするよりも神様のお言葉にしたがうほうがずっと大事だと気づきました。

そこで、マリアはきつぱりと言いました。「私は主のはしのためです。どうぞ、あなたのおことばどおり、この身になりますように」。はしめとは、しもべという意味です。「わたしは神様のご計画におしたがいします。どうぞ私をお用いください」と、自分を神様におさげしたのです。神様を信頼するからこそ言えたことでは

ね。神様のご計画は不思議なときがあり、信仰がテストされているようなときもあります。しかしマリアはこれが神様から出たことであり、神様のご計画は一番良いのだと確信できたのですね。

あなたへの神様のご計画

神様はナザレの名もない少女マリアを、神様のみ子、全世界の救い主、イエス様のお母さんとして選ばれました。やがてイエス様は町々村々をめぐる、多くの人たちの友となり、たくさんのお働きをされました。そして最後には、全世界のすべての人々、今に生きる私たちの罪や苦しみや病をも背負って、十字架にかかって死んでくださいました。そればかりか三日目によみがえられ、私たちの主として今も共に生きてくださっています！

アドベントはこのイエス様のお誕生を記念し、心に覚えながら過ごす期間です。神様は私たち一人ひとりを神様のお働きのために用いたいと願っておられます。神様のみなさんに立てておられるご計画はどのようなものなのでしょうか？ 神様に信頼し、神様のご計画の中を歩むことほど幸せな人生はありません！

♪何がそんなに♪（イン68）

聖書 ルカ1・26～38 テーマ マリアへの告知

序論

(石田高保)

現代においても「人事を尽くして天命を待つ」、「五十にして天命を知る」ということわざが使われています。

一、神の使命に応答する

御使いの言葉はあまりにも唐突で不思議なことだったので、マリアはすぐには受け入れることはできませんでした。けれども御使いの後の言葉に対しては「私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおり、この身になりますように」と言って従っています。わたしは神様にお仕えする者で、あなたのご計画がわたしの身の上に成就しますように。これは口先だけで言えた言葉ではないでしょう。なぜならこれによって彼女は茨の道を歩くことが予測されたからです。なにしろ婚約中に身ごもり、誰も聖霊によって身ごもったと理解してはくれないが、神を侮る言い訳としか聞こえなかったからです。当時の社会では姦淫した女性は石打によって死刑と決まっていました。マリアがそのように裁かれる危険

もありました。マリアは神のご計画のすべてを理解したわけではありませんでしたが、神を信頼して自分への使命を受け入れました。彼女は応答する備えのある人だったのです。安息日には神を礼拝し、普段の日には詩篇で祈るという生活をしていたと思われます。聖書によく親しんでいた女性であることは、(46～55)のいわゆるマリアの賛歌からわかります。こうして田舎町の名もないマリアが、女性としては史上最大の名前になりました。

彼女は後世の人々からこれほど尊敬を受けるとは思ってもみなかったでしょう。私たちの名前が歴史に残ることとはないでしょう。しかし神様は私たちを神の国の前進のために召して下さいました。クリスチャンであるならば誰でも、マリアと同じように神様から隣人に仕えるという使命をいただいています。家庭における使命、職場における使命、親せきや友人関係における使命、地域における使命、教会の働きにおける使命などが与えられているのです。人のためにしたことを神様はご自分にしたと見ます。人を見たらキリストと思えというわけですから。誰かのためにしたことを神様はご自分にしたこととして喜んで下さいます。私たちの小さな愛のわざが神の国の

前進のために役立つのです。

二、神の使命を実行する

御使いガブリエルは、いきなりマリアに姿を現し、〈おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます〉と言いました。これはそのまま私たちに向けて語られています。あなたは特別に恵まれた人です。主が共におられるという事実ほど私たちが力づけられるものはなく、これほどの祝福ありません。そのことを日々体験している私たちは、実に恵まれた者なのです。

マリアは御使いに、〈私は男の人を知りませんのに〉と尋ねていますが、神さまを疑っている言葉ではありません。人間には普通の方法以外で子どもが生まれることは、信じられないことです。から無理ありません。ですから御使いはマリアを責めてはいません。その答えは〈聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます〉。神さまの力が働くから可能です。極めつけは〈神にとって不可能なことは何もありません〉。

現代でも不可能を可能にする方は聖霊であることに変わりはありません。さらに御使いは、年老いたエリサベツが身ごもったことを告げて神の全能の力を証明しまし

た。御使いによるこの力強い宣言を聞いたとき、マリアに信仰が湧き上がったでしょう。そして全能の神に自分の人生を委ねる決心をしました。これからどんな難問をしいい込むことになるか不安だったでしょうが、神様に従って行ったなら、神様が責任を取ってくださると確信できました。聖霊の働きによって信じられないことが信じられてしまったわけです。神様にしかわからないことは、神様に任せようという信仰の姿勢です。神様に任せするなら、聖霊に満たされ、自分の能力を超えた働きをさせていただきます。

クリスマスの出来事は、御使いが現れて神の言葉を伝えることによって進展しています。ザカリヤ、マリア、ヨセフ、そしてベツレヘムの羊飼いたち。彼らはただ神の言葉を聞いて感心しただけではありません。それに促されて行動を起こしています。逆に言うとき神様は人間の信仰と従順をとおしてご計画を進めます。

結論

神様はクリスチャンが自由な意志を働かせて神の御心を選び取ることを願っています。従順を選び取ると、想像を超える祝福の道が開けます。

研究資料

(宮澤清志)

四福音書の中では、主にマタイとルカが主の降誕の出来事を記している。一方マルコは、主イエスの公生涯の開始を福音書の書き出しとし、ヨハネは降誕物語の意味をヨハネの視点から語っている。この個所を通して私たちは「神にとって不可能なことは一つもない」という、神の全能性と、それに対するマリアの受容・従順さを伝えたい。

テキスト

26 六か月目に エリサベツがバプテスマのヨハネをみごもつて六か月目(5〜25)。

27 ヨセフ 「主は加えたもう」という意味。ダビデ家の末裔で、ベツレヘム出身であった。大工を家業とし、ガリラヤのナザレに定住していた(2・4、マタイ1・18、13・55)。ヨセフの系図は聖書中2か所登場する(マタイ1・1〜16、ルカ3・23〜38)。メシヤはダビデの家系から出ることが、旧約の時代から預言されていた(Ⅱサムエル7・12〜13、イザヤ9・6〜7他)。いいなづけユダヤの「いいなづけ」は、事実上法的な「妻」。

28 おめでとう 直訳すると「喜びなさい」となる。ただの挨拶の言葉ではなく、喜びや恵みの伴った挨拶の言葉として用いられる。同時にこの喜びや恵みは、聖書では苦難を伴った喜び、あるいは苦難の最中の喜びとして描かれている(ヨハネ14・28、コロサイ1・24他)。マリアがこの御使いの申し出を受けることは、人間的にはこの上ない苦しみをも受けることに他ならない。

30 ここにきて、28節の「恵まれた方」という言葉が具体化される。御使いは、マリアに神のご計画を打ち明けたのである。注意すべきは、この神のご計画の中で、天使は彼女の腹を借りたいというお願いに來たのではない。有無を言わず、告知に來たのである。しかも、この場合の神の言葉を受け入れることは、ヨセフの愛も世間の信用も、場合によっては自らの命も失いかねないほどの申し出であった(28)。しかしマリアはその申し出を受け入れたのである。マリアはこの信仰によって讃えられたのである。恵み ザカリヤに対する第一声が「あなたの願いが聞き入れられたのです」(13)という、願いの結果としての成就であったことは対照的に、マリアに対しては、一方的な神からの選びの結果としての

語りかけとなっていることは注目したい。

31 イザヤ7・14の預言の成就。マリアの子が真の神であり、また真の人であることを示す。

32〜33 ダビデ契約の成就（Ⅱサムエル7・12〜16、イザヤ9・7他）。

34 どうして この語を直訳すると「どのような方法で」となる。マリアはあくまで方法を尋ねたのであって、疑いの言葉ではない。一方ザカリヤは、「何によって」（18）ともあるように、しるしを求める疑問文である。結果、マリアは次節においてその方法を御使いによって懇ろに語られ、ザカリヤは口がきけなくなった。あるいはこの両者の相違は、ザカリヤが祭司という職についている者であったのに対し、マリアはガラヤの一般人であること、またザカリヤが人生経験の豊富な老人であったのに対して、マリアがまだ少女であったことにも由来するであろう。

35 聖霊があなたの上に臨み 前節のマリアの問いを受けて、この懐胎が聖霊によるものであることを強調する。マリアの処女懐胎は聖霊の創造のわざであり（創世記1・2）、主の霊の創造行為である（エゼキエル37・1

〜14）。**おおいます** 直訳は「陰を落とす」「陰がかかる」という意味であり（使徒5・15）、旧約では、主の栄光の雲（出エジプト40・34、そして新約では変貌山における栄光の雲（マタイ17・5）に現れる。いと高き方の力（ギデユナミス）ここからダイナマイトという言葉が派生した。人間の想像を超えた神の力である。

36 エリサベツの懐胎は、マリアの使命、すなわち神の子の母となるという使命のしるしでもあった。しかも、エリサベツの懐胎が、神の超自然的な介入による懐胎であることを強調することによって、マリアの懐胎も強く神の超自然的な懐胎であることを示しているのである。

37 創世記18・14の引用。こと（ギ）レーマ 次節の「おことば」と同じ言葉が用いられており、言外に「あなたの言われたこと」という意味が含まれている。

38 はしため 文字通りには「（女）奴隷」の意味。おことばとどおり マリアのこの服従のゆえに、彼女は理想的な女性の典型とされたのである。

参考図書 A. T. Robertson, Word Pictures in the New Testament Volume II. The Gospel According to Luke (Broadman) 他

聖書

ルカ1・39〜56

タイトル

唇に賛美を！

暗唱聖句

私のたましいは主をあがめ、私の霊は私の救い主である神をたたえます。

ルカ1・46〜47

目標

真実な神の愛を覚え、神をほめたたえる。

導入

(飯田勝彦)

問題です。人は一日どのくらいの数の言葉を話していると思いますか？ 男性は七千語、女性は二万語だそうです。もし、他者に対して否定的な言葉を話しているとしたら、相手も自分も辛くなりますよね。話すなら他者も自分も活かされる言葉を話したいものです。

神さまから造られた私たちの唇は、不平不満を言うためではなく、神さまを賛美するにあります。神さまを賛美するとき、私たちの心は守られます。今日の箇所はマリアの賛美ですが、マリアの声はどんな声だったんでしょう。彼女はどんな表情でどんな気持ちで神さまを褒めたたえたのでしょうか。

天使の言った通り

先週は、天使ガブリエルがマリアに救い主を身ごもることを告げました。マリアは、それを最初は喜んで受け入れることが出来ませんでした。でも、子どもがいなかったエリサベツが身ごもっていることを聞きました。「あのエリサベツが妊娠している?!」、マリアの心は不可能にする神様に向けられたのです。

皆さんなら、本当にエリサベツが妊娠しているのか確かめたくありません。マリアもそうでした。彼女は急いでエリサベツを訪ねます。そしてマリアはエリサベツから衝撃的な言葉を聞きます。「私の胎内で子どもが喜んで踊りました」。エリサベツ本人の口から妊娠している事実を聞きました。まさに、天使の言った通りでした。

エリサベツの祝福

皆さんは、正月になると親類に挨拶に行くことがあります。年々、年に一度正月だけ会う親類もいれば、年に何度も会う親類もあります。マリアとエリサベツは親類関係でした。マリアとエリサベツはどうだったのでしょうか？ 詳しいことは分かりません。でも、今回のマリアの訪問はこれまでとは違いました。これまでマリアから

挨拶あされても何か特別なものは感じなかったでしょう。でも今回は、マリアの挨拶を聞いた瞬間、不思議なことが起こりました。一つは、お腹の子が踊りだしたのです。二つ目は、エリサベツが聖霊に満たされたのです。恐らくエリサベツは、これまでにない何とも言えない喜びと平安で心が満たされたのでしょう。そして彼女は喜びのあまり大声で叫びます。一度、エリサベツになったつもりで42〜45節を大声で叫ぶように読んでみましょう。エリサベツは救い主の母となったマリアとお腹の子を大いに祝福しました。

マリアは、自分が救い主を身ごもることはエリサベツを訪ねる前に話をしていません。でも、エリサベツはマリアが救い主を身ごもったことを知っていたのです。これもマリアにとってはびっくりすることだったでしょう。

マリアの賛美

マリア自身は、天使を通して語られた主の言葉が、自分の体になったことを体験しました。マリアは自分が救い主を身ごもるといふ喜びと同時にこれからの生活への不安が交じり合って複雑な思いだったでしょう。

しかし、彼女は高らかに神を賛美しました。「私のたましいは主をあがめ、私の霊は私の救い主である神をたたえます。この卑しいはしのために目を留めてくださったからです。」マリアはどのような表情で賛美したのでしょうか。それを聞いていた周りの人はどんな気持ちになったでしょうか？

まとめ

マリアは天使の言葉を受け入れ、救い主を身ごもりました。イエス様を救い主と信じたときから、私たちの内に聖なる救い主イエス様が住んでくださっています。救い主を宿すという不思議なことは、マリアだけのことでありません。救い主を信じる者は誰でも救い主を内に持つのです。

自分の弱さや足りなさを知っている人ほど、内に住まわれる主の恵みを感謝できます。そして、マリアのように「私のたましいは主をあがめ、私の霊は私の救い主である神をたたえます。この卑しいはしのために目を留めてくださったからです。」と賛美できるのです。

♪しゅにしたがいゆくは♪

(コ53、コ改119、ホ87、イン85)

聖書 ルカ1・39〜56 テーマ マリアの賛歌

序論

(石田高保)

神の御子が聖霊によってマリアのお腹に宿するということは空前絶後の超自然的な出来事なので、人間がすんなりと受けとめることは決してできません。そのため神様は御使いを派遣してマリアを説得し、エリサベツによってその裏付けを与えました。そのプロセスをとおして彼女は神のミッションを受け入れ、魂の底から神をほめたえます。これが世に名高いマリアの賛歌です。

一、信仰者による助け

ここはイエス様がマリアのお腹にいたときの出来事です。聖霊によって神の子を身ごもったという事実を世間のいったい誰が信じるだろうか、婚約者のヨセフにも打ち明けられる内容ではない、と戸惑っていると、御使いガブリエルはマリアに助け舟を出します。親戚のエリサベツが年を取ってから身ごもり、6か月にもなっているという事実を告げたのです。神様に不可能はない、と説得されてマリアは神の子を身ごもるという大任を引き受

けます。十代の女性が負うにはあまりにも重いミッションであったので、神はエリサベツというベテランの信仰者を用意したのでしょう。これを聞いたマリアは居ても立ってもいられず、エリサベツに会いに出かけます。このとき、マリアと同じような境遇にあり、自分の気持ちを打ち明けられる相手はエリサベツのほかにはいませんでした。肝胆相照らす仲と言うように、二人は神の著しいお働きを体験し、お互いに慰めと励ましを必要としていたのです。自分の経験した超自然的な出来事を心から理解してくれる人を神は用意して下さいました。

エリサベツから「主によって語られたことは必ず実現すると信じた人は、幸いです」と言われてどんなに力づけられたことでしょう。エリサベツは自分に語られた神の約束が成就しつつあることをマリアに証しすることによって、彼女に語られた主の約束も必ず成就すると確信させたのです。これから三か月間、エリサベツのところに滞在して聖徒の交わりの中に過ごしました。この交わりがナザレに帰ってから受ける世間の冷たい風を耐えさせたのかもしれません。

神様が自分にどんなに素晴らしいことをして下さった

かは、人になかなか理解してもらえないかもしれませんが。偶然として片付けられてしまうこともあるでしょう。しかしクリスチャンのお互いにあるのは、小さいと思える変化も出来事も、神の恵みとして感謝し合えます。そこがこの世ながら神の国というものです。私たちもキリストのからだとして、ほかのキリスト者との交わりを必要としています。うわべだけでなく、恵みと課題を分かち合い、心と心の響き合える信仰の友を持ちましょう。

二、賛美による助け

マリアはエリサベツの言葉を神様からのメッセージとしてすぐに受け入れます。そして聖霊の感動を受け、魂の底から主を賛美します。「私のたましいは主をあがめ、私の霊は私の救い主である神をたたえます」。ここに聖霊による喜びがあふれ出しています。御使いとエリサベツの言葉に励まされた喜びです。「この卑しいはしために目を留めてくださったからです」、これはエリサベツの境遇とも似ています。神はなぜ自分のような無きに等しい者を偉大なミッシヨンのために選んでくださったのか、と畏れ多い思いを表現しています。「力ある方が、私に大きなことをしてくださいましたからです」、処女にして

聖霊によって身ごもるという理解され得ないことも、苦渋の選択ではなく、積極的に受け取っています。マリアは身ごもったばかりなのに、すでに救い主が生まれたかのように信仰によって受け取っています。先取りの信仰であり、未来完了形の目で見ているわけです。私たちも祈っていることも、難しいと思える課題こそ完了形にしてみしましょう。希望の持ちにくい時代にあって、この信仰はいよいよ輝いてきます。自分を勇気づけるだけでなく、他の人をも勇気づけることができます。

「主はその御腕で力強いわざを行い、心の思いの高ぶる者を追い散らされました」、十代の女性が歌うにはスケールが壮大ですが、それだけに聖霊によって感動されていることを証ししています。「神は高ぶる者には敵対し、へりくだった者には恵みを与えられる」(Iペテロ5・5)とあるように、神の前に自分を貧しくし、主の恵みにする姿こそ祝福の原則ではないでしょうか。

結論

マリアは危機的な状況においてエリサベツをとおして神様の憐れみと励ましを体験しました。私たちも誰かにとってのエリサベツであることができるのです。

研究資料

(加藤 満)

マリア讃歌には、聖霊に語らされたイエスの使命と、その福音を描いている。それは霊的な領域に止まらない「社会変革による贖い」である。ここで未来の行為として表現される動詞は全て過去時制（アオリスト形）である。それは時間に縛られない真実を表現している。真実な神の愛はいま尚、世界を変革し続けているのである。

ここまで個別にバプテスマのヨハネとイエスの誕生物語が述べられ、この段落において二人の母親の、更には胎内の子どもの出会いを通し、二つの物語が合流し、ここに共通点と相違点を際立たせている。

この段落全体はマリアの訪問・エリサベツの祝福（39～45）と、マリアの讃歌（ラテン語でマグニフィカート、46～55）の二つの部分から構成されている。後半は、マリアの個人的な感謝（46～50）とイスラエルについての神の救いの業（51～55）と区分されるが、一貫して「神のあわれみ」のモチーフが流れている。

テキスト

39～45 マリアのエリサベツ訪問は、出産前に帰還して

いる（56）ことから、お産のお手伝いというよりも、受胎告知を受けた彼女の驚きと喜びの表れであった。子どもが喜んで踊りました エサウとヤコブがそうであるように（創世記25・22～26）、胎内の子どもの状態は将来の歩みを予兆している。ヨハネはイエスの先駆者として彼を喜ぶ。聖霊に満たされ 聖霊はエリサベツに自分の子どもが胎内で踊った事の意味を悟らせる。ルカ文書を通して、聖霊は神の救いの御業を一貫して担う存在として描かれる。祝福された方 祝福は辺境ナザレの女性という地理的、身分的辺境から始まり、エルサレムに帰る弟子への祝福で福音書が閉じ（ルカ24・50）、使徒の働きでエルサレムから地の果て（ローマ）まで展開する。アブラハム（55）の祝福の約束との深い関連が意識される。信じた人 主の言葉が必ず実現すると信じたマリアは幸いである。文脈としてザカリヤと対比があり、信仰の重要性を強調している。エリサベツにマリアへの嫉妬心が無いことは注目に値する。神がマリアに対してより大きな祝福を与えている事を、エリサベツは比較することなく一人の女性として神の前にへりくだって認めたのである。

46〜50 私のためしいは…たたえまず 詩篇34・1〜3

も参照。「あがめ」は「この上ない讃美」を意味する。卑しいはしため 直訳は「女奴隷」。マリヤが自覚する神との距離（主人と奴隷）、またイスラエルの社会的貧しさにおいての彼女の位置を意味する。御名…あわれみ この二つは神とその民との関係を前提としている。即ち、神はご自身の民を、ご自身の忠実さ故に、聖なる御名へと導く。民は、彼ら自身が経験した神の憐れみから聖なる御名を学ぶのである（詩篇111・9、103・17）。

51〜56 歌のこの部分は、社会権力構造の完全な逆転が描かれる。決定権を持つのは高ぶっている者でも権力ある者でも富む者でもない。メシヤを通して、神はこれらの者を全て転覆させようとしておられる。御腕で力強いわざを行い 出エジプトの御業を想起している（使徒13・17、詩篇118・15〜16）。権力のある者を王位から引き降ろし…富む者を何も持たせずに追い返されました ユダヤ人の理解として、外側の姿は内面の鏡である。権力と富に心を奪われる人々の力と支配による危うさは、鏡としてその政治と経済に働く悪魔的な支配を映している。王である神は御子の誕生とその働きを通し、王座に

座される。かつての支配者の特権と抑圧は廃止される。

社会的変革を行う人間の目に見える業は、神が王座に座されるといふ霊的現実を鏡として映すことにより、開始され、達成される。ここでのあわれみ（ギ）エレオス）は、〔へ〕セドの概念が色濃く表れている。その意味は神の「契約に対する忠実さ」である。アブラハムとその子孫に…忘れずに イエスの誕生を通して現される神の御業は、既にアブラハムから始まっているものである。しかし、聖書はその後の人間の過ちを隠し事なく記す。しかし尚も、神の憐れみは尽きていないのである。神はアブラハム、更にはイスラエルとの契約を覚え、そして、この時に至り、忠実にその約束を果たされる。

マリヤの讃歌は身分の低い者が高く上げられ、権力ある者がその座から引き下ろされ、そして両者が神の目的に完全に加わることを喜び神を賛美している。この「逆転としての救い」は「神の国の福音」としてルカ福音書、使徒の働きで展開する。

参考図書 レオン・モリス『ティンデル聖書註解 ルカによる福音書』（いのちのことば社）、J・B・グリーン、山田耕太訳『ルカ福音の神学』（新教出版社）、その他。

聖書

ルカ2・1〜7

タイトル
暗唱聖句馬小屋で生まれたイエス
宿屋には彼らのいる場所がなかったから
である。
ルカ2・7

目 標

心を開いてキリストをお迎える。

導入

(土屋開夫)

皆さん、あつという間に今年も終わりですね。どうですか、子どもの皆さんも、もしかしたら「忙しい、忙しい、あー忙しいっ！」と思いながら、バタバタと一年を過ごした子もいるかも知れませんね。

最近の子どもは忙しいですね。学校、宿題、学習塾、習い事。少しでも空いた時間はスマホのゲームやオモシロ動画。そんな皆さんの忙しい心の中や生活の中には、とても神様やイエス様が入る余地は無いかも知れませんか。どうですか？ ありますか？

でも一年の最後にいつもクリスマスのシーズンがあるのは、とても意味深いと思います。イエス様が、子どもも大人も、世界中の全ての人に「一番大事な事を忘れないで！」と語っておられる気がします。

最高に素晴らしいお方が来られた！

イエス様は最高に素晴らしいお方です！ なんといつたって、この全宇宙と私たち人間をお造りになった、本当の神様のひとり息子なんですから！ つまり神の国の王子様です！

その神の国の王子様であるイエス様が、神の国から、私たちの住む地上の世界に降りて来て下さったのです！ スゴイ事ですね！ ビックリマークが止まりません！

でも、もしイエス様が神様の姿のままでこの地上に來られたら大変ですね。そもそも目に見えないでしょうし、もし目に見えたとしても、太陽よりもまぶしくて大さいかも知れません。

でも大丈夫。イエス様は神様の姿で來られたのではありません。勿論、動物の姿でも、植物の姿でもありません。もしそうだったらお話も出来ません。でもイエス様は、私たちと全く同じ人間の姿になって、しかも私たちと同じようにお母さんのお腹に來て下さったのです！

そのお母さんの役目を引き受けたのが、先週聞いた、マリアさんですね。

イエス様を迎えたのは

さあ、そのマリアさんがお腹からイエス様を生み出す時が近づいてきました。ところがマリアさんは旅の途中です。なぜかと言うと、その時代の支配者のローマ皇帝が皆の人数を数えるために、「自分の出身地に帰れ」と命令したからです。昔も今も、支配者というのは人間を数えたり、番号を付けたりにして管理したがるのです。

イエス様はそんな私たちの世界に来て下さいました。でもベツレヘムの町も、久しぶりに帰ってきた人たちでいっぱいでした。もうすぐ、神の王子様であるイエス様が赤ちゃんの姿で生まれようとしているのに、それどころじゃないと、ワーワーワー大騒ぎ。どこの宿屋も旅館も満員です。

私たちのために来られたイエス様を迎え入れる場所も、人もどこにもないのです。たった一つ空いていたのは、王様の宮殿でも、豪華なホテルでもなく、静かな家畜小屋でした。でも落ち着ける場所だったと思います。そしてイエス様が生まれた時、その家畜小屋は、天国のような安らぎと祝福に包まれた事でしょう！

まとめ

私たちの心と頭の中はどうか？ 大勢のお客

で満員だったベツレヘムの宿屋のように、心と頭の中がイエス様以外の色んな事で満員だったら、とてもイエス様をお迎えする事は出来ません。尊い神のひとり子イエス様がすぐ近くにに来て下さった事さえ、全く気がつかないかも知れません。

イエス様を心にお迎えするために、そしてイエス様と一緒に生きていくためには、心を静かにする必要があります。目を閉じて、口も閉じて、手も、足も閉じます。そう、お祈りの姿勢です。そして心が静かになったら、イエス様にこう祈りましょう、「イエス様、私の心に宿して下さい。私の心の中にずっと住んで下さい」と。

♪主イエス様いつもわたしと♪(PW8)

聖書 ルカ2・1〜7 テーマ 馬小屋で生まれたイエス

序論

(宮澤清志)

キリストは家畜小屋に生まれ、飼葉おけに寝かされました。神の子が生まれるのにはまったくふさわしくない場所です。しかし、救い主の使命を象徴する場所です。それは偶然でも不運でもなく、キリストはその場所を、私たちに神の愛を届けるために自ら選びとってくださいました。

一、貧しい生まれ

身分の低い者は、簡単には身分の高い人に近づくことはできません。でも立場のある人は、苦しんでいる人や困っている人を助けたり励ますために、時を選んで近づくことができます。

私たちはどんなに神を求めても神に近づくことはできません。ただ神が私たちに近づいてくださるほかありません。キリストが貧しい生まれをしてくださったのは、どんなに自分の罪に悩んでいても、重荷に苦しんでいても、その人に近づき、寄り添ってくださるためです。

自分は豊かだ、不足はないと思っているときは、キリストを求めず、永遠の救いを知らないままです。「苦しみにあったことは 私にとって幸せでした。それにより私はあなたのおきてを学びました」(詩篇119・71)と歌われているように、私たちも貧しさそのものを恐れることも恥じることはありません。主によって益に変えられるからです。

またキリストは弟子に謙遜を教え、下座を選びなさいと命じられました。そのためにご自身が最も低くなられ、従う生き方を示してくださいました。放蕩息子が落ちてゆくどん底を主は自ら経験し、そこからやり直して父のもとに帰ろうとする者を支えてくださっています。

二、閉め出されたキリスト

キリストの誕生を世の多くの人は知りませんでした。それはただ貧しい生まれだったからだけではありません。関心を持たなかったからです。

羊飼いたちはベツレヘムで、博士たちはエルサレムで、出会った人たちにキリストの誕生を伝えていきます。でも実際に出かけて行った人はありませんでした。みんな日々のことで忙しくしていたからです。

ローマの皇帝やヘロデ王のような身分の高い人たちがけでなく、一般の人もキリストを迎える心をもっていますでした。

さらには神殿でシメオンが祈り、アンナが語り聞かせても、だれも興味を持ちません。礼拝をささげ、祈るために来ているはずなのに、主との生きた交わりを失っていたからです。

仕事のこと、生活のこと、さらには宗教を名乗っていても、本人は良いことをしているつもりでも、自分の求めを満たそうとするだけで神の義も愛も遠ざけている人は、キリストを閉め出してしまっています。

三、主よ、私の心にお住みください

「人の子には枕するところありません」（ルカ9・58）とも言われたキリストが、ただ一度、「今日、あなたの家に泊まることにしているから」（ルカ19・5）と声をかけられたのがザアカイです。ザアカイは金持ちでしたが、孤独で、人からは罪人呼ばわりされていました。しかし、イエス様を迎え入れたとき、ザアカイは救われ、その人生は新しくなりました。

私たちの心は汚れているかもしれません。心落ち着け

るときもなく、神に思いを向けることも少なかったかもしれません。でも、キリストは今も私たちの心の戸をたたいておられます。「良い」と受け入れてくださった恵みをたたえる、さらに主との深い交わりに導かれていくのです。

初めから心の中をすみずみまできれいにし、全部主に明け渡しなさいと言っているではありません。そんなことをしていたらとても主を迎えることはできません。主はわたしたちのことをよく知っておられます。汚い心のほんの一隅でも、まず主よおいでくださいと迎えることです。

日々の生活の中で、いつも主が共にいてくださり、私たちの思いを聞き、み言葉を通して語りかけておられることをおぼえましょう。主の導きに従って小さくても決心し、実行していくときに、主にある喜びがあふれ、人生が新しくされます。

結論

主はあなたと共に人生を歩みたいと願っておられます。心を開き、キリストを心と生涯にお迎えしましょう。

研究資料

(宮澤清志)

テキスト

1 アウグストゥス アウグストゥスとは称号であり、本名はガイウス・ユリウス・カエサル・オクタ비아ヌス。もともと彼はカエサル(シーザー)の姪の子であったが、カエサルの養子となり、その死後、政敵であったアントニウスを倒して、1世紀の長きにわたった内乱を収めて、帝政ローマの初代皇帝となった。紀元前27年から紀元後14年の彼の治世の間に、ローマを中心とする地中海世界に軍事的平和と政治的安定、そして経済的繁栄がもたらされ、いわゆる「ローマの平和」を確立した。このような功績により、彼のおとずれは、当時「福音」(よきおとずれ)と称されていた。**住民登録** 他の聖書では「人口調査」(口語訳)、「住民登録」(新共同訳)と訳されており、この人口登録の目的は、文字通りの住民の登録と人頭税の課税、そして戦時における徴兵のためであった。

2 キリニウスがシリアの総督であったときの、最初の**住民登録**であった ルカは、当時の資料を丹念に調べて、できる限り正確に記録しようとしていたようである。彼

の福音書の中には歴史的な背景を示す資料が多数存在する。この個所も「歴史家ルカ」の真骨頂が表される。

さて、キリニウスがシリアの総督であった時の住民登録は紀元6年であったと考えられており、マタイが記述する「ヘロデ王の時代」(マタイ2・1)(紀元前37〜紀元4)という史実に反する。しかし、**最初の**とは、「前の」「先立つ」とも訳されている言葉であり、人口調査はおおむね14年おきに行われていたとされているから、聖書に記述された年代は、おおよそ紀元前8年頃のことであろう。しかし、当時の人口調査には数年を要したから、おおよそ史実と合致していると考えられている。

3 **登録のために、それぞれ自分の町に帰って行った** ユダヤ人は系図を重んじ、またよく知つてもいた。ユダヤの住民登録は、おそらくユダヤの巡礼祭のような機会にあわせて「家に属し、その血筋」(4)でもある先祖の町に帰郷して登録する形をとっていた。それゆえ、その作業は手間のかかるものであった(2)。

4 救い主は、**ダビデの家** **ダビデの血筋** **そしてダビデの町** で生まれると預言されている。その預言とは、キリストはダビデの子孫として生まれ(Ⅱサムエル7・

12) 13)、「ダビデの町」ベツレヘムに生まれる(ミカ5・2)というものである。すなわち皇帝の勅令とヨセフの行動とは、図らずも旧約の預言を共に成就しているということになるのである。

5 身重になっていた、いいなずけの妻マリア 人口調査の対象は、成人男子に限られていた。しかし、ヨセフは婚約中に妊娠したマリアを村人の非難や中傷から守るためにも、ナザレからベツレヘムまでの140キロメートルあまりの道を連れて行くことに決めたのであろう。考えてみれば、身重のマリアにとつては想像を絶する過酷な旅であったことは想像に難くない。道路事情や医療など、現代とは比べものにならないくらい劣悪な状況下での移動である。

6 月が満ちて ルカは、この言葉で預言の成就や期間の満了にも用いていることから、マリアが臨月にはいったという、いわゆる肉体的な状況を描くだけではなく、神の約束の成就、神の時の到来をも指し示している言葉である。

7 救い主の誕生の瞬間は、飼葉桶に寝かされた救い主の姿であった。降誕物語において、ルカだけが飼葉桶

の幼子を物語る(7、12、16)。飼葉桶は、貧しさ、小ささを物語っており、貧しい者、小さき者への福音を解き明かしたルカならではの表現といえる。しかし、なぜ救い主の誕生が「飼葉桶」なのだろうか。それは、宿屋には彼らのいる場所がなかったからである。当時の宿屋は1階を家畜用のスペース、2階を客間としていたようであるから、この状況は理解できよう。救い主誕生の出发点は、宿屋からの閉め出しであった。

全ての時代そして全世界の救い主、王の王にして主なる神であるキリストが、宿屋から追い出され、飼葉桶に寝かされるということは象徴的である。ルカが描く救い主は、この世の貧しい者、取るに足りない者、弱い者のための救い主の姿を私たちに知らせる。同時にこの姿は現代の忙しい私たちへのメッセージともなる。この世の事に忙しくしている私たちには、この「救い主」を迎え入れる「場所」はあるだろうか。クリスマス、そして年末の今だからこそ考えるべき事柄である。

参考図書 11月28日分と同じ。

聖書

ルカ2・8～20

タイトル
暗唱聖句

みんなが喜びクリスマス
今日ダビデの町で、あなたがたのために
救い主がお生まれになりました。この方
こそ主キリストです。
ルカ2・11

目標

キリスト降誕の意味を知り、その喜びを
共に分かち合う。

導入

(後藤 真)

クリスマスとはキリスト（救い主）とミサ（礼拝）を
合わせたことばで、救い主を礼拝するという意味です。
ごちそうやケーキ、パーティーやプレゼントのことばか
り考えて救い主イエス様を忘れては困ります。でも、救
い主が生まれてくださったということは、お祝いしたく
なるような、すばらしいできごとだったのです。

羊飼いたちに

羊飼いたちはその日、野宿をしながら羊のお世話をし
ていました。いと違って電気がありません。夜になる
と真っ暗で、空に星が光っているだけ。そこに天使が現
れて神様の栄光が周りを照らしたのです。羊飼いたちは

びっくりして怖くなり、ぶるぶる震えていました。

天使は羊飼いたちに言いました。

「恐れることはありません。見なさい。私は、この民
全体に与えられる、大きな喜びを告げ知らせます。今日
ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれに
なりました。この方こそ主キリストです。あなたがた
は、布にくるまって飼葉桶に寝ているあかちゃんを見つ
けます。それが、あなたがたのための証拠です。」

民全体に与えられるすばらしい知らせ。救い主が生ま
れたという知らせは、王様でもなく、礼拝の仕事をする
祭司でもなく、聖書の学者でもなく、そのころのイスラ
エルで低く見られていた羊飼いたちに最初に知らされた
のです。救い主キリストは、弱い人、低く見られている
人を大切にし、いっしょにいてくださるのです。

天使の賛美

すると突然、その天使といっしょにものすごい数の天
使が現れて神様を賛美しました。

「いと高きところで神に栄光があるように。地の上に
平和があるように」

救い主が生まれてくださるとき、神様がほめたたえら

れます。そして救い主が来てくださる地、わたしたちが住んでいる世界には平和がもたらされる道が開かれます。平和というのは戦争やけんかがないだけではありません。神様とわたしたちの間に平和があること、わたしたちが神様の思いを知って、神様に喜ばれる生き方をすることです。

救い主はわたしたちを罪と滅びから救い、神様といっしょに生きる道を与えてくださるのです。それは神様にとっても喜びであり、栄光なのです。

みんなで話し合い、見に行き、喜ぶ

天使たちは羊飼いたちを離れて天に上っていきました。羊飼いたちは話し合いました。

「今見たことは夢だったのかな…」

「いや、天使は救い主がお生まれになったとたしかに言ったぞ」

「天使たちの賛美も素晴らしかった！」

一人だけでは信じられないこと、よくわからないことも、みんなで話し合うことでよくわかるようになります。一人で聖書を読んでお祈りすることはとても大事です。でもそれだけでは神様のことはよく分かりません。教会

に来ていっしょに聖書を読み、みんなで話し合い、お互いにお祈りすることが大切なのです。

羊飼いたちはいっしょにベツレヘムに行きました。羊たちもメエメエ言いながらついてきたのでしょうか。そして飼葉桶に寝ている赤ちゃんをさがし出しました。

「ぼくたち、天使から教えてもらったんです」

「この赤ちゃんは救い主だって」

聞いていた人たちはびっくりしました。まさかマリヤが産んだ赤ちゃんがそんな立派な方だなんて！マリヤは天使からそのことを聞いていたので知っていましたが、心の中でそのことを思いめぐらせるだけでした。こうして羊飼いたちはみんなで救い主がお生まれになったことを喜び、神様を礼拝し、賛美しながら帰って行きました。きょうみんなでいっしょに救い主がお生まれになったお話を聞きました。羊飼いたちのように、みんなでお話を聞いて思ったことを話しあってみましょう。そしてみんなで救い主がうまれたことを喜びましょう。

♪天には栄え♪（新聖歌79）

聖書 ルカ2・8〜20 テーマ 救い主誕生の知らせ

序論

(宮澤清志)

クリスマスおめでとうございます。神のひとり子であるイエスがこの世にお生まれになった夜、主の御使いは羊飼いに「民全体に与えられる大きな喜びを告げる」と告げました。キリスト降誕の知らせは、喜びをもって語られ、受け入れる者に救いの喜びをもたらしえました。

一、届けられた喜び

マリアがイエスを生んだのは、ふだん住んでいるナザレから120キロメートルも離れたベツレヘムでした。それはローマの皇帝が出した人口調査の勅令に従うためでした。この世の権力者は、臨月を迎えて旅をしなければならぬ若い夫婦の苦労まで顧みてはくれません。力の強い者は、弱い者のために多少の配慮はしても、自ら労苦を負うことはありません。でも、神はそんな旅先で、救い主を生まれさせてくださいました。私たちにつきまとい、救い主を生まれさせてくださいました。私たちにつきまとい、救い主を生まれさせてくださいました。私たちにつきま

そんな中でも喜びを与えるためです。

また、御使いの知らせを聞いた羊飼いたちは、当時人口調査の対象にもされないほどに身分の低い人たちでした。宗教家たちからは汚れた人々とみなされ、神殿に礼拝に行くこともできません。でも神はそんな羊飼いたちに、救い主のお生まれを一番に届けてくださいました。この知らせを聞いて救い主に会いに行こうとする心があつたからです。

身分のある人たちは、同じ知らせを聞いても動こうとはしません。イエスは「医者が必要とするのは、健康な人ではなく病人です。」(ルカ5・31)とおっしゃられました。神の目から見て、霊的に健康な人は一人もいません。ただほとんどの人は自分が弱っていることに気がついていないので、神の呼びかけに応えないのです。

「今泣いている人たちは幸いです。あなたがたは笑うようになるからです」(ルカ6・21)。神のもとに近づけない私たちのところに、神の御子が来てくださったのがクリスマスです。「私には神の救いが必要です。私を救ってください」と素直に求め、キリストのお生まれを私のための救いの知らせ、喜びの知らせとして受け取り

ましょう。

二、歩みだす喜び

マタイの福音書に、東の国から博士（占星術の学者）たちがイエスを訪ねてきたことが記されています。博士たちはイエスに会って何か優れた知恵をいただいたわけではありません。でもイエスを拝み、献げ物を献げました。羊飼いたちはベツレヘムに行き、乳飲み子を見つけました。一番に救い主に会ったからといって特別な恵みがあつたわけではありません。生活を豊かにしてくださいとか、願ひ事もしませんでした。献げる物は何もありません。しかし、神への賛美の思いにあふれて帰って왔습니다。

博士たちも羊飼いたちも、何かをもらったからでもしてもらえたからでもありません。自分たちも神におぼえられていることを確かめ、これから生きていく中で神が共に歩んでくださることを心に刻むことができたことが大きな喜びでした。この喜びをいただいただけで、人生は新しくなります。

聖書が示している喜び、神の約束に基く喜びは「先取りの喜び」です。今日の前にあるのが困難でも、不安で

も、神の祝福の約束に立って、先に喜ぶことができるのです。インマヌエル（神は我々と共におられる）と約束されているイエスを信じ、神を礼拝することから、また一歩を踏み出していきけるのです。

クリスマスはまことの礼拝の再出発です。かつて、シナイ山で主のご顕現（けげん）に触れたところから、イスラエル人の礼拝が始まりました。今度は神のひとり子がこの世に来てくださった、その事実だけで神を賛美し、礼拝するのです。博士たちが帰っていく東の国も、羊飼いたちが帰っていくベツレヘムの野も、今までと変わりはありません。でも主が共におられる信仰と喜びをいただいて変えられた人たちが帰っていきます。

私たちもイエス・キリストがこの世に生れてきてくださった幸いを心から喜び、クリスマスを人生の転機とし、また信仰生涯の再出発の時としてお祝いしましょう。これからの歩みに神の救いの約束が実現していきます。

結論

人生最大の喜びの知らせであるキリスト誕生を感謝し、まだ知らない人にも伝えて、共に喜びましょう。

研究資料

(宮澤清志)

テキスト

8 救い主誕生のニュースは、最初羊飼いにのみたらされた。当時の羊飼いは、社会的には軽蔑されていた存在であった。彼らが律法の一点一画までも守るということは、職業柄無理だったからである。彼らには、人間が作った祭儀律法の遵守よりも、羊の世話が優先されたのである。

9 主の使いが彼らのところに来て ルカはしばしばみ使いの顕現けんげんを描写する。み使いの顕現は、同時に主の栄光をもたらしした。栄光(ギ)ドクサは、神の臨在の顕現であり、主の現れそのものであった。しかし、あくまでもこの言葉は「主のドクサ」であって、この言葉が人に用いられる時には「栄誉」(Iテサロニケ2・6)、「面目」(ルカ14・10、口語訳)となる。わたしたちは、あくまでも主の栄光を反射させる存在なのであり、決して主の栄光を人間が取ってはならないのである。非常に恐れた 直訳すると「大きな恐れを恐れた」の意味。これは10節の「大きな喜び」と対になっている。人間が主の栄光にさらされる時、人間の恐れが喜びへと変えられる。圧倒的な神の栄光である。

10 恐れることはありません 直訳は「恐れることをやめなさい」。告げ知らせます(ギ)エウアンゲリゾー この動詞の名詞形が福音(ギ)エウアンゲリオンであり、み使いの知らせる「大きな喜び」とは、福音そのものであることが分かる。

11・12 今日 ルカ文書に多く用いられている、救いの到来を表す終末的表現(ルカ4・21、5・26、19・9、23・43等)。救い主…主…キリスト この幼な子は、まず救い主であった。幼子はこの称号のゆえにみ使いによつてイエス(主は救いである)と名付けるようにと指定されていた(1・31)。イエスの来臨の目的は人類の救いにある。同時に主(ギ)キュリオス という称号は、ヘブル語の「ヤーウエ」をギリシャ語に訳したもので、「わたしは在りて在る者である」という、永遠の自存者にして創造主なる神を表す名である。すなわちこの幼な子は旧約聖書に啓示された神の名で呼ばれているわけである。同時にこの称号は、時のローマ皇帝にも用いられていたが、ルカによると、この世の救い主として来られた方は、すべてのものの主であり、また同時に歴史の主でもあると語るのである。そして次の称号であるキリスト(ギ)クリストス については、ヘブ

ル語の「マーシアアハ」(油そそがれた者、すなわちメシヤ)のギリシャ語訳。旧約聖書に預言され、待ち望まれてきたメシヤが、時至ってイエスとして到来したことを表す。

12 しるし 救い主誕生のしるしとは、飼葉桶の中に寝かせてある幼な子である。飼葉桶の中に幼な子が寝かせてあるということは、通常ありえないことであった。それゆえ幼な子のしるしとしては十分であった。と同時に、ここに、全世界の救い主が地上の最も低いところに降り^おられた謙遜さ(ピリピ2・6-11)と、この世の王と対置された救い主の姿とが表されている。

13 御使いの福音の告知に続いて、天の軍勢の賛美が続く。**軍勢** とは、軍隊用語が用いられており、文字どおり天の軍隊、天の大軍といった意味が込められている。

14 いと高き所で、**栄光が神にあるように** ラテン語で「ゲロリヤ・イン・エクセルシス・デオ」。地の上で、**平和がみこころにかなう人々にあるように** みこころにかなう人々とは、「すべての民」(10、口語訳)の言い換えであろう。もちろん様々な解釈がありうるが、主イエスにおいて、神がすべての人々をみこころにかなう者として下さるのである。**平和** アウグストゥスの時代、「パックス・ロマーナ」

(ローマの平和)という時代が幕を開けた。ローマには平和と繁栄がもたらされようとしていた。しかし、この地上に真の平和をもたらすことのできる方は、アウグストゥスの平和とは対照的な、飼葉桶に寝ているひとりのみどりごによってもたらされた。

15-20 これまでの救い主の誕生とその告知の場面に居合わせた三者の様子が描かれる。まず、御使いから主の降誕の告知を聞かされた羊飼いたちは、急いで行つて、救い主の誕生の出来事を人々に伝えた。そして彼ら自身はこの出来事のゆえに神をあがめ、また賛美した。一方羊飼いたちからこのことを伝え聞いた人々は、この出来事を聞いて、不思議に思った。同じようにこの出来事を羊飼いたちから聞いたマリヤは、これらの事をことごとく心に留めて、思い巡らしていた。イエスの降誕の現場に居合わせたこれらの人々の違いに心を留めたい。主の降誕の出来事を不思議に思うのみで終わってしまう人々のようであつてはならない。このメッセージを語る「今日」(11)、私たちの信仰の姿勢が問われている。

参考図書 11月28日分と同じ。

聖書

詩篇103・1〜22

タイトル

神の恵みを覚える

わがたましいよ 主をほめたたえよ。／

主が良くしてくださったことを何一つ忘

れるな。 詩篇103・2

目標

一年間の神の恵みを覚え、神を賛美する。

導入

(後藤 真)

みなさんの教会ではクリスマスのお祝いは先週でしたか。それとも今日ですか。もうクリスマスツリーを片付けたよ、というところもあるでしょうか。教会の暦では、クリスマスは12月25日に始まって12日間続きます。今日はまだクリスマスです。救い主を礼拝する「クリスマス」の気持ちで歩みましょう。

さて、今日は今年最後の日曜日。一年間、神様からいただいた恵みを思い出してみましよう。

何一つ忘れるな

みなさんには、今年とってもよかったなあ、うれしかったなあということがありますか。そのことを思い出しながら、今日の暗唱聖句、2節のことばをみなさんで言っ

てみましょう。覚えている人は何も見ないで挑戦しましょう。

「わがたましいよ 主をほめたたえよ。／主が良くしてくださったことを何一つ忘れるな。」

主というのは神様のことです。神様が良くしてくださったことを何一つ忘れないようにしなさい、と言われるならみなさんはどんな感じがしますか。よかったこと、うれしかったこと、楽しかったことは思い出すけれど、それが神様にしていただいたことだとは思っていないかったということはありませんか。

イエス様に病気を治してもらった十人の人がいました。病気が治ったことをイエス様に感謝し、神様をほめたたえるために帰ってきたのは十人のうちの一人でした。わたしたちは神様にしていただいた良いことを忘れてしまいがちです。ずっと治らなかつた病気を治してもうくらいうれしいことがあってもそうなのです。

神様のしてくださったことを全部思い出す、忘れていくことが何一つないというくらいに、思い出す。それくらいいいでしょうけんめいに神様のことを考えるということがわたしたちには大切なのです。

神様が良くしてくださったこと

神様が良くしてくださったこととは何でしょうか。何か思い出してきましたか。色々なことがあると思います。が、その中でもいちばんすごいことは、神様が罪を赦してくださったことです。

今日の詩篇には、

「主はあなたのすべての咎を赦し、あなたのすべての病をいやし、あなたをいのちの穴から救われたのだ」と、書かれています。このことはイスラエルがバビロンという国から救われたことを表しています。

イスラエルは神様に逆らい、罪をおかしたため、バビロンに滅ぼされ、苦しまなければなりません。でもイスラエルが神様に立ち返るとき、神様はイスラエルの罪を赦して、バビロンから救い出してくださったのです。

みなさんも神様に逆らって、神様の喜ばないことをしたことがあったのではないのでしょうか。神様から心が離れ、自分の思い通りのことをするのが当たり前になっていたことはありませんか。でも、悔い改めるなら、神様はわたしたちの罪を赦してください。そして罪の生

活から救い出して、もういちど神様といっしょに歩めるように導いてくださいます。そして神様は神様といっしょに生きる人を、毎日生き生きと生活できるように助けてくださるのです。

神様をほめたたえよう

こんなによくしてくださった神様にわたしたちは何をお返しすることができるようか。もう一度今日の暗唱聖句を言いましょう。

「わがたましいよ 主をほめたたえよ。／主が良くしてくださったことを何一つ忘れるな。」

主、神様をほめたたえること、礼拝することです。ただし、「わがたましいよ」というのは、たましいだけではないことではありません。心も体も全部、わたしのすべてで礼拝することです。

一年最後の日曜日。クリスマスの素晴らしい恵みと神様が良くしてくださったことを心に留めて、教会のみなさんといっしょに、心から礼拝する日にしましょう。

♪すばらしい神様♪ (PW23)

聖書 詩篇103・1～22 テーマ 神の恵みを覚える

序論

(福井文彦)

本詩はその題でダビデの作とされている、全詩篇でも最も美しい賛美の詩です。また、世界の多くの人々に知られている純粋な賛美の歌です。作者は神を畏れ敬う者への神の愛を告げています。

一、すべての恵みを心にとめよ

最初と最後に、〈わがたましいよ 主をほめたたえよ〉と三度(1、2、22)繰り返されています。御霊に導かれた詩人が、全霊全生全身をつくして心の底より神を賛美するようにとの呼びかけです。私たちの魂は、主の恵みによって死から命に移されました。それで、〈私のうちにあるすべてのもの〉が、〈聖なる御名〉を賛美することができなのです。

口語訳では「そのすべてのめぐみを心にとめよ」と訳されています。〈私のうちにあるすべてのもの〉が、〈聖なる御名〉を賛美できるのは、「そのすべてのめぐみを心にとめ」ることから生まれます。〈聖なる御名〉を賛美で

きるのは、「すべてのめぐみ」を思い起こすことから生まれます。

「すべてのめぐみ」とは〈主が良くしてくださったこと〉です。その核心は、主が今すでに、罪の赦しゆるを与えてくださっていることだけでなく、将来的なすべての病の癒やしのことです(3)。これは、〈あなたのいのちを穴から贖あがなわれ〉た時、すなわち、私たちのからだの復活の時に、目に見える形で表されます(4)。すべての恵みの主を賛美しつつ生きるなら、〈あなたの若さは 驚のように新しくなる〉(5、イザヤ40・31)のです。

二、神の恵みとあわれみ

6節からはイスラエル民族の歴史を振り返り、神の恵みとあわれみについて詩っています。

神は〈義とさばきを…行われる〉お方です。そして、この〈義とさばき〉とは、〈すべての虐げられている人々のために〉行われます。具体的には、イスラエルを虐待するエジプトに対するさばきとして表されたのです(7)。

また、神は〈情け深い〉お方です(出エジプト34・6、7)。「情け」も「恵み」も、ヘブル語の「ヘセッド」の

訳です。神は、イスラエルを「愛され」（申命記7・8）、彼らと契約を結び、彼らに裏切られながらもご自身の約束に真実であられるお方です。

さらに、〈父がその子をあわれむように／主はご自分を恐れる者をあわれまれる〉。愛に富む父なる神です。「あわれみ」とは、真実な「父」がその「子」に対していただく感情です。イエスはその「あわれみ」を、放蕩息子^{ほうとうむすこ}を待つ父の姿を通して話されました（ルカ15・22）。

私たちは神の恵みのために、しばしば神を賛美します。しかし、そのご性質のため賛美することはまれです。恵みを喜ぶよりも、恵みの主ご自身を喜ぶことが大切です。

三、主の語りかけを聴きつつ生きる

イスラエルの野に咲く花は、驚くほど美しいと同時に短命です（15）。人の一生も草のようにはかなく、その栄えは野の花のように短いものです。しかし、愛なる神はそんな私たちの命を美しく輝かせることができます。その神の愛は永遠であり、過ぎ行くこの世のものではありません（17）。その対象者は、主の愛に満ちた契約を深く心で味わい、昼も夜も黙想し、心に留めて行う人です（18）。

最後に、19節から22節で、〈主をほめたたえよ〉との賛美が繰り返されています。ただし、その勧めは、〈わがたましい〉から広げられ、主の御使いたち、主のすべての軍勢とすべての被造物にまで向かいます。その根拠は〈主は 天にご自分の王座を堅く立て／その王国はすべてを統べ治める〉ことを確信しているからです。

この世界には様々な矛盾、不条理がありますが、それは神にある完全な平和を生み出すための座みの苦しみにすぎません。この世界は、神にとって制御不能なのではなく、確実に完成に向かっているのです。主は、ご自身の〈みことば〉によってこの世界を支配しておられます。その〈みことば〉が私たちにも与えられています。それこそが、私たちを「すべての恵み」に満ち足らせてくださる神の御手のわざの根本です。

結論

全身全霊で主をほめたたえる者の魂は、驚く^わように新たにされ、命の輝きが生まれます。私たちの心の底にある「渇き」を真の意味で満足させてくださる方は、愛とあわれみの主ご自身なのです。

研究資料

(辻林和己)

この詩篇には、神の恵みに対する感謝が全体に満ち満ちている。「ダビデによる。」という表題が付けられているのは、ダビデがこの詩の原形を作ったからだという説、国の救いを自分の喜びとして歌うこの詩篇の表現が国を代表する王としてのダビデと関連付けられているために付けられたという説等がある。

1～5節は詩人である自分(ダビデ)に向かって主の恵みに感謝するように勧めている。6～14節は神の民への恵みに対する感謝、15～19節は人のはかなさと主の恵みが永遠であることが歌われている。20節以下の結語は主のみ使いと全被造物への賛美の呼びかけである。

テキスト

1 私のうちにあるすべてのものよ 私の知性・感情・

意志等自分の持てるすべてをもつて主を賛美するよう呼び掛けている。**御名**(へ)シエーム) 十戒にある神の名をみだりとなえてはならないとの戒めから、ユダヤ人は神の名を大切にした。ユダヤ思想では、名は単に区別

のためにあるのではなく、人格、力を宿すものとして受けとめられた。

2 **主が良くしてくださったこと** 原語は[へ]ゲムラウヴで「彼の報い」の意。新共同訳では「主の御計らい」と訳されている。その一つ一つが3～5節に列挙されている。それらは「咎の赦し」、「病の癒し」、「いのちの贖い」、「恵みとあわれみ」、「良いもので満ち足らせてくださること」、「新しくしてくださること」である。

4 **穴**(へ)シャハット) 原語は本来、「穴」という意味であるが、口語訳、新共同訳は「墓」と訳している。英訳聖書(KJV)では「破滅」と訳されている。原語は「陰府」を象徴する語である。**恵み**(へ)ヘセッド) 語意は広く、「愛」、「あわれみ」、「いつくしみ」などとも訳される。契約関係での忠誠を示す意味があり、神の愛の契約に関わる。**あわれみ**(へ)ラハミーム) 元々、親子、兄弟にあるような近親的情愛が原意にある。いつくしみと同様、契約の概念が含まれている。感情的なものではなく、正義と公平が伴う。

5 **鷲のように新しくなる** 神からの命、力が、猛禽類の鷲の生命力にたとえられている。私たちは神の恵みに

よって、心身共に新たな力をいただき、霊において日々、新しくされる（イザヤ40・31参照）。

6 虐げられている人々 詩人の同胞、イスラエルの民。

7 主は ご自分の道をモーセに…知らされた方 神がモーセと語られた（出エジプト33・11）ときのことである。そのみわざ 出エジプトのみわざ等、神の成されたことを指している。

8～9 情け深い 原語は〔ヘ〕ハンヌーン。怒るのに遅く、恵み豊かである。…、とこしえに 怒ってはおられない… 続く10節まで主なる神の真のご性質が歌われている。

11 天が地上はるかに高いように 神による罪の赦しの恵みの豊かさ、限りなさが歌われている（詩篇36・6、57・10参照）。

12 東が西から遠く離れているように 神の赦しの徹底さを示している。

13 父がその子をあわれむように 神のあわれみは人間には測り知れないが、ここではそれが地上の父親の自分の子に対するあわれみにたとえられている。

12 私たちの成り立ち 「成り立ち」〔ヘ〕イエーツェルは、創世記2・7の「人を形造り」の動詞「形造る」の

名詞形。創造時、人は「大地のちりで」形造られた。神のかたちに造られた、非常に良い存在であった（創世記1・27、31）。しかし、罪の故に「土のちりにすぎない」状態になってしまった。にもかかわらず、神は私たちの現状をご存じであり、心に留めてくださっている。

15 人 原語は〔ヘ〕エノーシユ。語根は「弱い」の意。その一生は草のよう 人の命の弱さとはかなさが、草にたとえられている（詩篇90・3～6参照）。人は咲く。野の花のように 人の世の栄華の空しさが野の花にたとえられている。

17 しかし 【主】の恵みは とこしえからとこしえまで 地上の人生の有限性に対して、神の恵みの永遠性が歌われている。4節で歌われているように、神は人との契約を守り、そのご愛を注ぎ続けられるお方である。20～22 【主】をほめたたえよ この賛美が繰り返される。最終行で、1節の歌い出しの賛美に戻っている。

参考図書 富井悠夫「詩篇」『新実用聖書注解』（いのちのことば社）、榎原康夫「詩篇」『新聖書注解・旧約3』（いのちのことば社）他

牧羊ひろば



服部喜望教会 教会学校

●子どもカフェ

服部の教会学校では、月に一回、「子どもカフェ」というのが開かれてきました。先生方がおにぎりを握り卵焼

私たち服部喜望教会の教会学校は、ご婦人の浅野先生、青年女性の岡野先生、牧師夫人の山下の3人で教師をしています。生徒は、普段は信徒子弟の子どもが3人。そのほか時々顔を出してくれる子が1、2人程おります。教会員のお孫さん方も時々来てくれる子たちがあります。賛美は、アカペラですが、賛美の賜物をお持ちの青年の先生による綺麗な歌声に導かれ、色々な賛美で元気に主をほめたたえています。

主の恵みに守られ、イエスさまを愛し、子ども達を愛する先生方によって、この地においてずっと教会学校が続けられて来ました。

きを焼いてくださったり、教会のご婦人が手作りお菓子を振舞ってくださったり。当日は、近くの公園に出向いて案内を配り、来てくれた子ども達とゲームやかみしばい、賛美をし、美味しいカフェタイムを楽しみます。

これは、教会学校に来る子達とお話していた際に、朝ごはんを食べていない子達がいる事を知った教会学校の先生方によって始められたイエスさまの愛の取り組みでした。

子どもカフェについて、ある教会学校の先生がよくこの聖書の言葉を思い起こして話しておられました。「イエスは彼らに言われた。『さあ来て、朝の食事をしなさい』」(ヨハネ21・12)。復活されたイエスさまが、弟子たちのために朝ごはんを用意して浜辺で待っていてくださった、あの場面のことです。愛に満ちたイエスさまのそのお姿。本当にイエスさまはお優しいお方です、と。私たちもそのように、子どもたちにさせていたいただきたい。

「来月の子どもカフェは何をしましょう?！」と話し合う時、私たちは笑顔でした。そして、今度たこ焼きもクレープもホットケーキもやきそばもみんなのできるよう

にと、念願の子どもカフェ用の大きなホットプレートを購入しました。素敵！これなら一度にたくさん焼けて、これからずっと使えるね！たくさんの子どもが来ても大丈夫だね。いっしょに作ったら楽しいね。そう話していた矢先、二〇二〇年春です。コロナの感染拡大、緊急事態宣言。

●窓辺の教会学校

「子どもたちが一人でも多く教会に来て、救われますように」いつだってそれが祈禱課題でしたのに。気楽に「教会に来てね」と言えなくなっていました。四方八方の窓を開け放ち、椅子を離し、心配の拭えない中で教会学校を開きました。もちろん、子どもカフェも、毎



コロナ前の子どもカフェ

週のおやつタイムもお休み。そんな中、教師の三人で顔を合わせては「この中でも何かできないかな」と話していました。

そして、アドベントを迎えようとした頃、こんな提案がありました。

窓辺いっぱい、クリスマスの紙芝居を貼ろう。登下校の子どもたちはじめ、沢山の人が行き交うこの窓辺に。人を迎えられないなら、外に掲げよう。そしてクリスマスには、窓辺の前の小さな広場に子ども達を集めて、プレゼントを渡そう。お菓子とみことばの恵みのメッセージをいっぱい詰め込もう！

そうして、クリスマスには、23人の子どもたちに福音のプレゼントを渡すことができました。その次の月には「靴屋のマルチン」。イースターにはイエスさまの十字架と復活の紙芝居を飾りました。立ち止まって読んでもらえるように、クイズコーナーを作ったり、足跡を地面に貼り付けて辿るようにしたりもしました。

後になって聞いたのが、先生方はかつてより、窓辺にみことばを掲げたい、とずっと考えておられたとのこと。その願いが、コロナの状況を通して開かれていったので

すね。この働きは、「窓辺の教会学校」と名づけられました。きつとこれからも、良い形で続けていき、子どもたちに福音を届ける手段となれると思います。

二〇二一年の春、また緊急事態宣言となり、教会は閉じられました。教会学校はオンラインで守ってきました。YouTubeの教会学校動画を見て、LINEのテレビ電話で分かち合いとお祈りをしています。

(山下 愛)



窓辺の教会学校

●U君の思い出

ここで、教会学校の浅野先生より、ある一人の男の子のについてのお話を紹介します。

ある日5年生くらいの男の子（U君）が両親に連れられて教会学校へ来ました。とても教育熱心な両親のようでした。一年くらい毎週欠かさず来ていました。ところがU君は全く話をしない子でした。子ども同士でも私た



クリスマス

ち教師とも一言も話さない子でした。何を考えているのか、楽しいのか、楽しくないのか、わかっているのか、いないのかもわかりません。

ある時、お話の後で「みんな目を閉じてください。神様を信じます」という人は、そっと手を上げて下さい」と言うと、なんとU君が誰よりも早く何のためらいもなくサッと手を上げたのです。この子は何を話しても聞いていない、わかっているかと思っていた私は本当にビックリしました。私こそ、何もわかっていなかったんだ。「U君、ゴメンネ。」

U君のことを通して深く教えられました。見える外側だけでは心の中はわからない。決して見えないところで判断してはならないと。

ある日突然、両親が



2020年 マスク姿での特別賛美と子ども祝福式

来られて、来週からは塾に行くので今日で最後です、と。それ以来U君は2度と来なくなってしまいました。あれから30年近くが経ちましたが、今も毎朝U君のことを祈っています。私たちCS教師は、今日の前の子どもたちを愛すると同時に、かつて出会った子どもたちすることも生涯祈り続けて行く使命があるように思います。特に未信者の家庭の子どもたちは、もし私が祈るのを止めたら、もう誰も祈る者はいないだと思いと、祈らないではいられません。

(浅野幸子)

●今までもこれから

最後に、岡野先生のお証しをもってまとめとさせていただきます。

私がCS教師に導かれてまだ数年ですが、これまでもいろいろなことがありました。たくさんの子どもたちが招かれていた時もあれば、続けて来ていた子どもがどんどんいろいろな事情で離れていき、誰も来ない日曜日もありました。子どもたちそれぞれの家庭環境、バックグラウンドが複雑で、アプローチに悩むこともありまし

た。また、教会の事、神さまの事を知らない子どもたちを、初めての場所に誘うこと、住所を尋ねる難しさを以前よりも感じます。今は、社会の変化によって子どもを取り巻く環境が大きく変わったことに加え、コロナの影響もあります。しかし、それでも、たくさんの方の祈りと働きに支えられ、何よりも神さまの大きな導きにより、ここまで一度も閉めることなく教会学校を続ける事ができました。

一年に一度、教会学校に来れるか来れないかの子どもたちが、服部喜望に来ることを楽しみにしていたり、教会学校からのお便りを大切に残してくれているという話を耳にしました。それは、やはり神さまの力によるもので、私たちの想像を超えたところで、子どもたち一人一人をとらえてくださっているのだと思います。伝道者の書にあるように、神さまがなさる全てのことに時があり、一番良い時が用意されている事を信じています。今できること一つ一つを大切に、これからも歩んでいきたいと思っています。

(岡野優子)



いつものメンバーで記念撮影パシャ

おわりに

『牧羊者』二〇二一年度Ⅲ巻をお届けできますことを感謝します。また、執筆者のご労に感謝いたします。

巻頭言は新見キリスト教会・和気教会の土屋信二師が執筆してくださいました。教師養成講座は二〇〇六年度Ⅰ巻に掲載された藪野潤一師の原稿を一部編集して再掲させていただきます。「牧羊ひろば」では服部喜望教会のCSを紹介していただきました。

今号の執筆者、奉仕者を紹介いたします。

『牧羊者』のご購読・ご利用について

* 分級用に、ワークA(幼稚園向け)、B(主に小学生1～3年生向け)、C(主に小学生4～6年生向け)を用意しています。また、付録として「子ども聖書日課」、「フラッシュカード」、「み言葉カード」、「中高科へのヒント」があります。いずれも、下記ホームページから無料でダウンロードできます。送付ご希望の方には、ワークは各600円+税でお送りします。
信徒局 教会教育室 ホームページ
<http://cs.jccj.info/>

* ご注文は、日本イエス・キリスト教団(事務局)まで。申込み、部数変更等のための用紙も、上記ホームページからダウンロードできます。
神戸市兵庫区塚本通3-3-19
電話 (078) 575-5511
FAX (078) 575-6611

メッセージ例	櫻井めぐみ師 飯田勝彦師 土屋開夫師
聖書講解	和田牧子師 後藤真師
研究資料	小泉創師 石田高保師 宮澤清志師 福井文彦師 高橋頼男師 宮澤清志師 辻林和己師 金井由嗣師 加藤満師 中島啓一師
ワーク(A)	吉田美穂師 鎌野幸師 宇野真佑美師 石川剛士師 山下大喜師 勝田幸恵師
(B)	野勢かほる師 竹崎光則師
(C)	田中裕明師 勝田幸恵師 上森恭子師 八幡直人師 後藤健一師 三輪正見師 石田高保師 小野淳子師 田中愛子師 中高科へのヒント 後藤栄子師 柴田福音師 松浦あん姉 子ども聖書日課 後藤栄子師 柴田福音師 松浦あん姉 フラッシュカード 丹羽遥姉 柴田福音師 松浦あん姉
み言葉カード・イラスト	後藤栄子師 柴田福音師 松浦あん姉 丹羽遥姉 柴田福音師 松浦あん姉 ワプロ打ち込み 多田豊子師 中島啓一師 校 正 後藤健一師
また、事務作業・発送の教団事務所の兄姉、印刷の松本共栄印刷、菱三印刷に心から感謝いたします。(中島啓一)	

聖書教育教案誌 牧羊者

二〇二一年度 Ⅲ巻

二〇二一年一月一日発行

発行所 日本イエス・キリスト教団 信託局 教会教育室
企画監修 日本イエス・キリスト教団 信託局 教会教育室
神戸市兵庫区塚本通三-三-一九

印刷所 菱三印刷株式会社
電話 (〇七八) 五七五-五五一
FAX (〇七八) 五七五-一六六一

電話 (〇七八) 五七六-三九六一

* 聖書 新改訳2017 ©2017 新日本聖書刊行会 許諾番号 4-2-1750号